

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

大井谷石切場跡
上塩治横穴墓群第14支群
上塩治横穴墓群第15支群
上塩治横穴墓群第16支群

1997・3

建設省出雲工事事務所
島根県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

大井谷石切場跡
上塩治横穴墓群第14支群
上塩治横穴墓群第15支群
上塩治横穴墓群第16支群

1997・3

建設省出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局からの委託の受け、平成3（1991）年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の発掘調査を行っています。本書は、平成4・5（1992・1993）年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、上塩冶横穴墓群第14・15・16支群および大井谷石切場跡について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲東部の出雲市周辺地域は、島根県下でも有数の遺跡集中地区であり、歴史的文化遺産に恵まれたところとして知られています。今回の調査は、神戸川との合流部に近い出雲市上塩冶町大井谷地区に所在する3つの横穴墓群と、近世の石切場跡について行いました。前者の調査では、これまで同じ上塩冶横穴墓群としてまとめられながらも、その平面プランや天井のスタイルなどが示すように、支群毎にかなり多様な在り方を示す実態が明らかになり、また後者の調査では、県下で石切場跡をはじめて本格的に調査することになるなど、この地域の歴史や文化を知るうえで貴重な資料が得られました。

本書が、多少なりともこの地域の埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いに思います。

なお、この発掘調査に当たり、建設省出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援・ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成9（1997）年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例　　言

1. 本書は、1992（平成4）・1993（平成5）の両年度にわたって、島根県教育委員会が建設省中国建設局の委託を受けて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、下記の遺跡の調査報告書である。

上塙治横穴墓群第14支群	島根県出雲市上塙治町1492、3152-2
上塙治横穴墓群第15支群	島根県出雲市上塙治町1455、3152-2
上塙治横穴墓群第16支群	島根県出雲市上塙治町3152-1
大井谷右切場跡	島根県出雲市上塙治町1456、1492、3152-2

2. 図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指している。したがって、磁北より6°50'、真北より0°20'東の方向を示している。

3. 出土遺物および実測図・写真は、島根県教育委員会埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

4. 遺物実測図は主に永島いづみが行い、永井宏昌、松崎潤、鳥谷芳雄がこれに加わった。また、遺構・遺物実測図の作成は、永井宏昌、鳥谷芳雄、永島いづみ、釘宮和子、月森和子、金森千恵子、守屋かおるがあたり、さらに野中洋子、高橋啓子、来海順子の協力を得た。遺物観察表と出雲市周辺地域の遺跡一覧表の作成では、江角ひろみの協力を得た。写真は鳥谷芳雄、永井宏昌、山岡清志、宮本正保が撮影したものである。

5. 本書の掲載図版・写真的うち、正倉院宝物に関する第71図の5の写真是、宮内庁正倉院事務所の承諾・提供を得て使用したものである。また、同図の1. 2. 3. 4の写真是、それぞれ埼玉県教育委員会、熊本県教育委員会、奈良国立文化財研究所の承諾を得て、各文献より転載したものである。各関係機関に対し、心からお礼を申し上げたい。さらに、人井谷石切場跡に関する空中写真測量図および写真是、建設省山雲工事事務所が(株)国際航業に委託して作成したものを使用した。

6. 1501号穴出土のヘラ書き文字の解読に当たっては、特に国立歴史民俗博物館教授平川南氏にご指導をいただいた。また、石切場跡出土の陶磁器は、九州陶磁資料館大橋康二氏にご教示いただいた。ともに記して感謝したい。

7. 調査に当たっては、別記調査指導の方のほかに次の方々にも有益な指導助言と協力をいただいた。松本岩雄、柳浦俊一、宮本正保、内田律雄、原俊二、宍道年弘、遠藤浩巳、杉谷愛象、段上達雄、勝部正郊、加川泰蔵、仲佐重俊、井上多津男、井上政治、美山一夫、井関忠義、林部均

8. 本書の編集・執筆は、鳥谷芳雄が行った。

本文目次

I	調査に至る経緯と経過	1
	調査に至る経緯	1
	調査の経過	1
	調査の組織	3
II	位置と環境	4
III	大井谷石切場跡の調査	10
	調査の概要	10
	I 地点の遺構と出土遺物	10
	II 地点の遺構と出土遺物	22
	III 地点の遺構	32
	IV 地点の遺構	33
IV	上塩冶横穴墓群第14支群の調査	35
	調査の概要	35
	1号穴 (1401)	35
	2号穴 (1402)	41
	3号穴 (1403)	41
	4号遺構 (1404)	44
	5号穴 (1405)	45
	6号遺構 (1406)	47
	7号穴 (1407)	48
	8号穴 (1408)	50
	9号穴 (1409)	51
	10号穴 (1410)	53
	SK01	55
	遺構に伴わない遺物	56
V	上塩冶横穴墓群第15支群の調査	57
	調査の概要	57
	1号穴 (1501)	57
	ヘラ書き文字	65
	2号穴 (1502)	66

3号遺構(1503)	68
4号穴(1504)	68
遺構に伴わない出土遺物	70
 VI I塩治横穴群第16支群の調査	71
調査の概要	71
1号穴(1601)	72
2号遺構(1602)	75
3号遺構(1603)	76
遺構に伴わない出土遺物	76
 VII まとめ	88
大井谷石切場跡について	88
石切場跡の概要と石切り技法の復元	88
県下における類似石切場跡	89
文献資料と聞き取り調査	90
上塩治横穴墓群第14・15・16支群について	90
3支群の概要と特色	90
出土遺物の時期と特徴	91
畿内産(系)上師器について	93
ヘラ書き文字について	94

表 目 次

第1表 出雲市および周辺地区遺跡一覧	5
第2表 芙伊川放水路事業開削部周辺の遺跡一覧	7
第3表 I塩治横穴墓群第14~16支群外出土遺物観察表	80

挿 図 目 次

第1図	斐伊川放水路発掘調査対象地位置図	1
第2図	斐伊川・神戸川及び調査地点位置図	1
第3図	斐伊川放水路事業計画図	2
第4図	出雲市周辺遺跡分布図	4
第5図	斐伊川放水路事業開削部遺跡分布図	6
第6図	人井谷石切場跡・上塙治横穴墓群第14～16支群位置図(1:1000)	9
第7図	大井谷石切場跡I・平面図(1:80)	11
第8図	大井谷石切場跡I・立面図(1:80)	13
第9図	人井谷石切場跡I・上層断面図(1:120)	15
第10図	大井谷石切場跡I・大断面図その1(1:160)	16
第11図	大井谷石切場跡I・大断面図その2(1:160)	17
第12図	人井谷石切場跡I・小断面図その1(1:120)	18
第13図	大井谷石切場跡I・小断面図その2(1:120)	19
第14図	大井谷石切場跡I・出土遺物実測図(1:3)	21
第15図	大井谷石切場跡I・出土石材実測図(1:20)	21
第16図	大井谷石切場跡II・平面図(1:80)	23
第17図	大井谷石切場跡II・立面図(1:80)	25
第18図	大井谷石切場跡II・上層断面図(1:120)	26
第19図	大井谷石切場跡II・大断面図その1(1:160)	27
第20図	大井谷石切場跡II・大断面図その2(1:160)	28
第21図	大井谷石切場跡II・小断面図その1(1:120)	29
第22図	大井谷石切場跡II・小断面図その2(1:120)	30
第23図	大井谷石切場跡II・小断面図その3(1:120)	31
第24図	大井谷石切場跡II・出土遺物実測図(1:3)	32
第25図	大井谷石切場跡III・遺構実測図(1:60)	33
第26図	大井谷石切場跡IV・遺構実測図(1:60)	34
第27図	1401遺構実測図(1:50)	36
第28図	1401山上遺物実測図(1:3)	36
第29図	上塙治横穴墓群第14支群配置図その1(平面図・立面図)(1:160)	37
第30図	上塙治横穴墓群第14支群配置図その2(平面図・立面図)(1:160)	39
第31図	1402遺構実測図(1:50)	42
第32図	1403遺構実測図(1:50)	43
第33図	1403山上遺物実測図(1:3)	44
第34図	1404遺構実測図(1:50)	45

第35図	1404復土出土遺物実測図（1:3）	46
第36図	1405遺構実測図（1:50）	46
第37図	1405及び周辺出土遺物実測図（1:3）	47
第38図	1406遺構実測図（1:50）	48
第39図	1407遺構実測図（1:50）	49
第40図	1408遺構実測図（1:50）	51
第41図	1408出土遺物実測図（1:3）	52
第42図	1409遺構実測図（1:50）	52
第43図	1409出土遺物実測図（1:3）	54
第45図	1410出土遺物実測図（1:3）	55
第46図	S K01遺構実測図（1:50）	56
第47図	上塙治横穴墓群第15・16支群断面図（1:400）	57
第48図	上塙治横穴墓群第15・16支群地形測量図（1:400）	58
第49図	上塙治横穴墓群第15支群配置図（平面図、立面図、1:200）	95
第50図	1501遺構実測図（1:50）	61
第51図	1501出土遺物実測図その1（1:3）	63
第52図	1501出土遺物実測図その2（1:3）	64
第53図	1501出土ヘラ書き文字と参考資料	65
第54図	1502遺構実測図（1:50）	67
第55図	1503遺構実測図（1:50）	68
第56図	1504遺構実測図（1:50）	69
第57図	1504遺物実測図（1:3）	69
第58図	上塙治横穴墓群第16支群配置図（平面図、立面図、1:200）	71
第59図	1601遺構実測図（1:50）	73
第60図	1601出土遺物実測図（1:3）	76
第61図	1602遺構実測図（1:50）	77
第62図	1603遺構実測図（1:50）	78
第64図	大井谷石切場跡石切り工程復元模式図	85
第65図	上塙治横穴墓群第14支群全遺構図（1:80）	86
第66図	I塙治横穴墓群第15・16支群全遺構図（1:80）	87
第67図	大井谷石切場跡出土遺物実測図（1:3）	88
第68図	出雲地方における近世・近代石切場跡分布図	89
第69図	上塙治横穴墓群第14・15・16支群出土示準須恵器図（1:4）	92
第70図	上塙治横穴墓群第6・14支群出土暗文土器実測図（1:3）	93
第71図	出土ヘラ書き文字「各」と参考資料図	94

I 調査に至る経緯と調査の経過

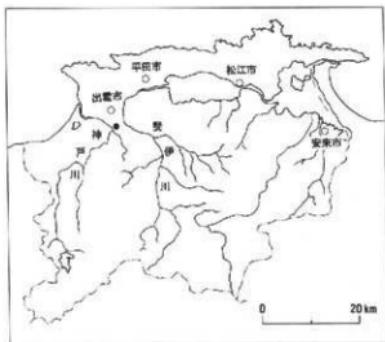
1. 調査に至る経緯

斐伊川放水路は、島根県の出雲西部を流れる斐伊川・神戸川の二大河川に計画された、建設省が実施する大規模建設事業である。この事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を本川中流左岸の来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市の上塩治町半分付近において神戸川に合流させ、また、それにより下流では、神戸川の自己流量と斐伊川本川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとするものである。規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及んでいる。この計画は、斐伊川の洪水の一部を早くしかも安全に日本海に流すことを目的にし、島根県が昭和44年

島根県教育委員会は、こうした事業計画の推移・決定のなか、昭和50年度に分流地域の埋蔵文化財の分布調査を実施したのを手初めに、同55年3月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行、その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課および県教委文化課の三者間で協議が進められ、同3年1月には再度分布調査を実施した。そして、同2年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に事業予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施することが決定し、同3年度（第1年次）からよいよ調査事業がスタートする運びとなった。



第1図 豊伊川放水路発掘調査対象地位置図



第2図 肥伊川・神戸川及び調査地点位置図

2. 調査の経過

本書に関係した事業年度は、平成4年度（第2年次）と同5年度（第3年次）である。平成4年度は、県教委と建設省地方建設局が4月9日付けで委託契約を交わし、2班体制で調査に入ったが、うち1班が7月いっぱいまで三田谷Ⅱ遺跡の調査を終えた後、建設省との協議により三田谷より大井谷にぬける工事用仮設道路の建設が急がれるとして、周知の遺跡である上塙治横穴墓群第14・15支群が存在する大井谷進入路の入り口部分で試掘調査に着手することとなる。

なった。この結果、道路予定地に広範囲にわたって同支群が存在することが確認され、新たに石切場跡（大井谷石切場跡）も認めたため、これらの遺跡が存在する約7000m²について直ちに本調査することとなった。8月3日からの試掘にはじまり、12月24日をもって現地調査を終了した。この間、12月1・2日には地元で親子3代にわたって石工業を営んできた加田泰蔵氏、および安来市で石工業を営む仲佐重俊氏、島根県立工業技術センター地質研究員井上多津男氏を現地に招き、大井谷石切場跡について所見をうかがった。また、同じく12月2日・10日・17日には3回にわたって建設省が主体事業となり石切場跡の空中写真測量を行った。さらに、12月20日には上塙治横穴墓群第14・15支群および大井谷石切場跡の発掘調査現場で現地説明会を開催した。

平成5年度は、4月1日付けで委託契約を結び、当年度も2班編成で調査にとりかかった。建設省との協議により、1班が開削部の全般的な試掘調査を行う一方、もう1班が昨年度中に行った試掘調査の結果を踏まえて、上塙治横穴墓群第16支群の存在する丘陵部約2100m²について調査を実施することとなった。現地調査は4月20日より開始して5月28日まで行ったが、6月8日には空中写真測量を実施してそのすべてを終了した。なお、この後も引き続き三田谷II遺跡2区の調査にかかり、10月20日まで現地調査を実施し、帰京して三田谷II遺跡1・2区の報告書作成に入った。その後、調査担当者は、平成6・7年度と引き続き半分地区三田谷I遺跡の現地調査を担当したこともある、本報告書は主に平成6年度の冬期間を中心に図版等を整理しまとめ、そして8年度において執筆し作成したものである。



第3図 斐伊川放水路事業計画図

3. 調査の組織

平成4・5年度の2カ年にわたって実施した上塩冶横穴墓群第14~16支群および大井谷石切場跡の発掘調査に関わった関係者は次のとおりである。

・平成4(1992)年度

調査指導者 池田満雄(鳥根県文化財保護審議会委員)、渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)
事務局 木次理雄(文化課長)、勝部昭(埋蔵文化財調査センター長)、山根成二(課長補佐)、久家儀夫(課長補佐)、工藤直樹(企画調整係主事)、有川實(鳥根県教育文化財団嘱託)
調査員 烏谷芳雄(埋蔵文化財調査センター調査第1係文化財保護主事)、永井宏昌(同教諭兼主事)、津森敏(同教諭兼主事)
遺物整理 小村睦子、太田和子、永田節子、石川とみ子、来海順子、永島いずみ、釘宮和子
発掘調査作業員 内田勝之、和田虎雄、秋田忠三、福代寛逸、楳原幸成、須山林吉、高橋辰夫、田中重吉、飯国協二、吉田茂、今岡実、足立省吉、岡文三、柳楽孝子、東原敬子、佐藤益子、村上智子、神西博江、佐藤宣美、石原さやか

・平成5(1993)年度

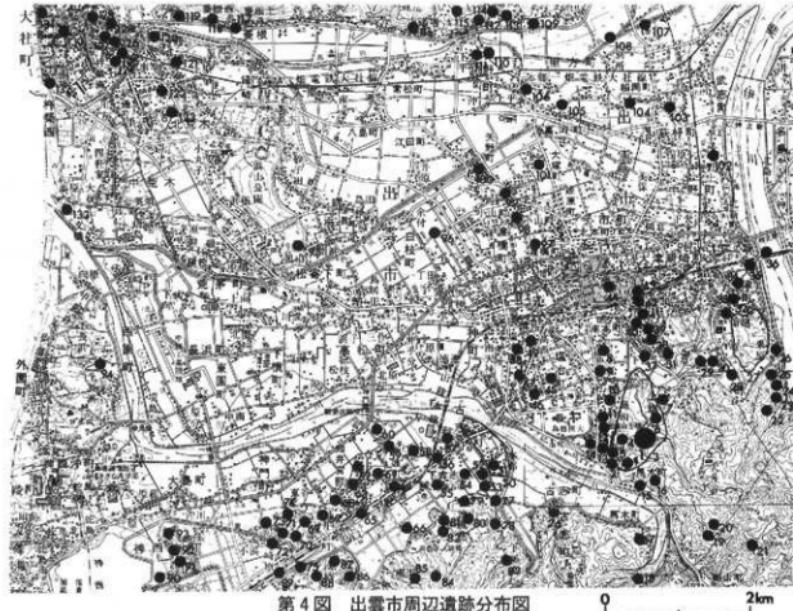
調査指導者 田中義昭(鳥根大学法文学部教授)、三次利一(奈良教育大学教授)、平川南(国立歴史民俗博物館教授)
事務局 広沢卓嗣(文化課長)、勝部昭(埋蔵文化財調査センター長)、山根成二(課長補佐)、久家儀夫(課長補佐)、工藤直樹(企画調整係主事)、有田實(鳥根県教育文化財団嘱託)
調査員 烏谷芳雄(埋蔵文化財調査センター調査第1係文化財保護主事)、永井宏昌(同教諭兼主事)、山岡清志(同教諭兼主事)
協力者 松崎潤(中国建設弘済会、技術員)
遺物整理 小村睦子、太田和子、永田節子、石川とみ子、永岡麻衣子、永島いずみ、金坂恵美子、釘宮和子
発掘調査作業員 小村熊雄、和田虎雄、秋田忠三、福代寛逸、楳原幸成、須山林吉、高橋辰夫、田中重吉、飯国協二、吉田茂、今岡実、石田亨夫、庄司俊郎、渡部桂司、柳楽孝子、東原敬子、佐藤益子、村上智子、神西博江、神西都

II 位置と環境

島根県出雲市を中心とする出雲西部地域は、東は宍道湖、西は大社湾、そして北と南は緩やかな山塊に囲まれながら、その中央に沖積平野である出雲平野が位置している。もっとも出雲平野が現在のような地形に定着したのは、それまで西進して大社湾に注いでいた斐伊川が宍道湖に逆流するようになった江戸時代以降のことであり、出雲平野一帯をめぐる長い歴史の中にあってはかなり新しい段階のことといえる。また、斐伊川・神戸川の2大河川の堆積作用によって形成された平野の微高地の存在も、人々の居住空間の推移とも深く関係しており、地理的な環境要因の一つとして見逃せないものがある。

縄文時代の出雲平野は、そのほとんどが海面下にあったとも考えられ、今日段階で遺跡の存在が明らかにされているのは、平野の縁辺部を中心に確認されているにすぎず、大社町の菱根遺跡や、出雲市の上長浜遺跡・矢野遺跡、そして、この斐伊川放水路事業に伴って近年知られるようになった三田谷I遺跡とごくわずかである。三田谷I遺跡では、晩期の土器とともに打製の大型石斧が多量に出土しており、この地域の次代に向けての開発史を知るうえで貴重な遺跡である。

弥生時代になると、はじめ大社周辺に大社境内遺跡や原山遺跡が知られ、やがてはこれらの遺跡より平野の底湿地部分にも遺跡の広がりがみられるようになる。このことは、出雲平野西部が日本海の一部ではなく、湾入して入り海の状況を呈してきたことを物語るものである。また、出雲市の矢野遺跡・多間院遺跡・天神遺跡に代表されるように、大規模な集落遺跡が出現するようになり、居住空間が平野中央部の微高地にまで大きく広がったことが知られる。また、この時代の遺跡として最近注



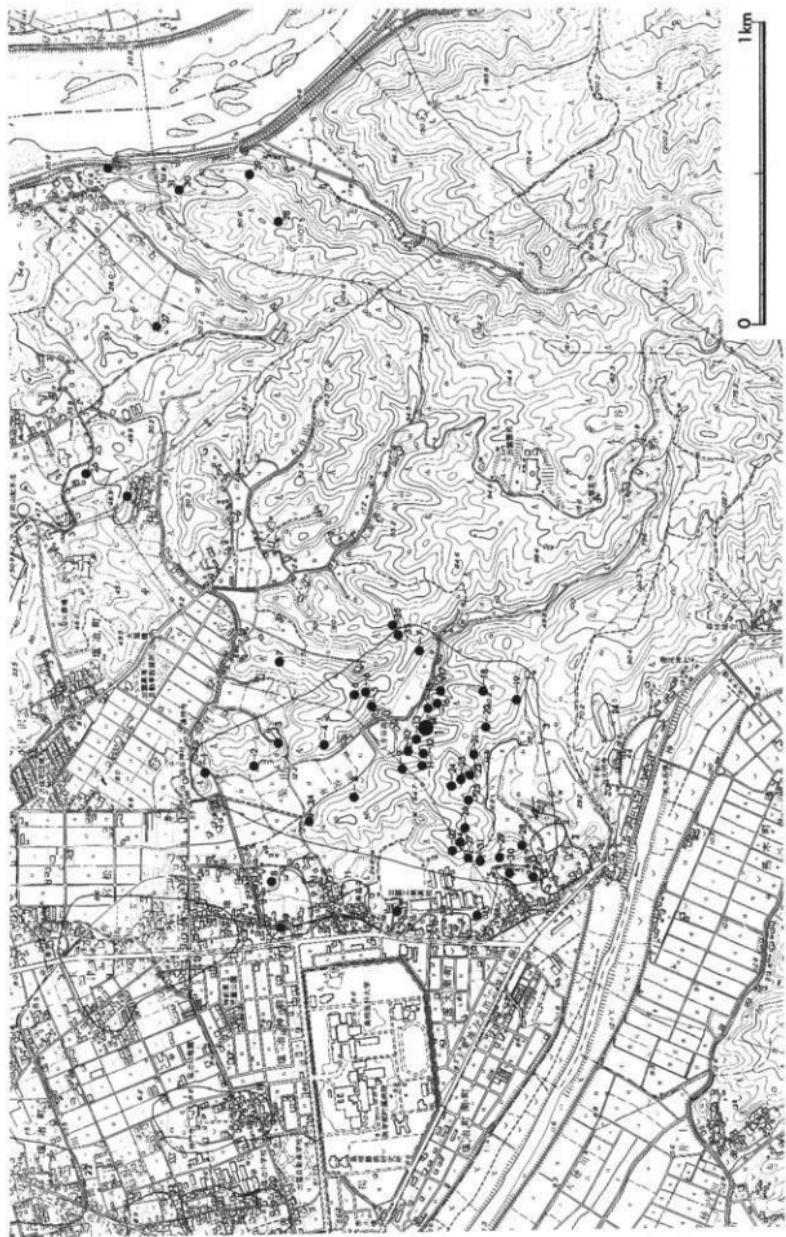
第4図 出雲市周辺遺跡分布図

0 2km

No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別
1	大井谷石切場跡	石切場跡	46	塙治小学校付近遺跡	散布地	87	間谷古墳	埴埴墓聚墳地
2	三田谷遺跡群	散布地	47	弓原遺跡	散布地	88	間谷東古墳	坑穴
3	I施治横穴群	横穴群	48	天神遺跡	集落遺跡	89	古垣内遺跡	古土
4	半分城跡	城跡	49	高西遺跡	散布地	90	湖東岸山横穴墓群	古散占
5	半分瓦窯跡	窯跡		伝塙治氏館跡	館	91	山地古墳	風烽
6	大井谷城跡	城跡	50	古志本郡遺跡	集落遺跡	92	山地遺跡	散集
7	菅沢古墳	古墳	51	大槌古墳	古	93	佐伯神社古墳	烽跡
8	角田遺跡	散布地	52	思案橋北遺跡	散布地	94	I長浜貝塚	地
9	宮松遺跡	集落遺跡	53	古志遺跡	田畠遺跡	95	馬見烽跡	地
10	I塙治築山古墳	古墳	54	集落遺跡	集落遺跡	96	白枝荒神道遺跡	地
	築山遺跡	集落遺跡	55	上船遺跡	散布地	97	渡橋遺跡	地
	塙治官館跡	館	56	正達寺北遺跡	散布地	98	小山遺跡	地
11	寿昌寺遺跡	散布地	57	引法寺北邊付近遺跡	散布地	99	小山遺跡	地
	寿昌寺西遺跡	古墳	58	下吉天満宮付近遺跡	散布地	100	矢野遺跡	地
12	地藏山古墳	古墳	59	阿弥陀寺西古墳	散布地	101	大塚遺跡	地
	田口遺跡	散布地	60	極楽寺付近遺跡	散布地	102	人冢古墳	地
13	半分古墳	古墳	61	東原遺跡	散布地	103	萩原I遺跡	地
	半分遺跡	古墳	62	多聞院北遺跡	散布地	104	萩原古墳	地
14	出雲工業西遺跡	散布地	63	吉井宮多聞院遺跡	散落遺跡	105	福岡遺跡	地
15	光明寺南古墳	古墳	64	青瀬遺跡	散布地	106	高岡I遺跡	地
16	光明寺古墳群	古墳	65	嘉儀遺跡	散布地	107	高浜川岸遺跡	地
17	小坂古墳	古墳	66	比布智跡	散布地	108	里方別所遺跡	地
	刈山古墳群	古墳	67	智伊御跡	散布地	109	前川遺跡	地
18	馬木岩礫跡	古墳	68	觀守寺付近遺跡	散布地	110	平八石原遺跡	地
	大井閑遺跡	古墳	69	福知寺横穴墓群	穴墓	111	高浜II遺跡	地
19	大坊古墓	古		福知寺裏土坑墓	土坑			
	山本塲	塲		山本塲一部土巣横穴	穴坑			
20	大坊經塲	経塲		墓群	墓			
				二成範夫宅裏山横穴	横穴墓	112	石臼古墳	古墳
21	唐嶺城跡	城跡		龜群				
				東谷北横穴墓	横穴墓	113	熊見谷遺跡	地
22	椎現山横穴墓群	横穴墓	70	東谷横穴墓群	横穴墓	114	大前山古墳	地
23	椎乳山古墳	古墳		真幸I丘西横穴墓群	横穴墓	115	蛇山跡	地
24	長廻遺跡	散布地		マキチノ坂横穴墓群	横穴墓	116	龟谷遺跡	地
25	長廻横穴墓	横穴墓		祝谷地次老農横穴	横穴墓			
26	来原岩塗跡	水路	71	墓群	墓			
27	西谷塙草群	塙草	72	小浜山横穴墓群	横穴墓	117	西組古墳群	地
28	間府岩塗跡	水路	73	小浜山横穴墓群	墓地	118	麥根闐屋跡	地
29	音沢古墓	古墓	74	東谷II遺跡	散布地	119	麥根免本郷遺跡	地
30	長者原廃寺	散布地	75	東谷I遺跡	地	120	乙兒燒窯跡	地
31	下沢古墳	古	76	明谷西遺跡	散土坑	121	原山遺跡	地
32	西谷横穴墓	横穴墓	77	井上古墳	古坑	122	南原遺跡	地
33	中山丘陵遺跡	散布地		井上横穴墓群	穴坑	123	中分日塚	地
34	神田遺跡	散布地		放飛山横穴墓群	穴坑	124	鹿嶽山遺跡	地
35	石上手遺跡	散布地		放飛山遺跡	地	125	鹿嶽山遺跡	地
36	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	78	宇賀池堤跡	散池	126	鹿嶽山若跡	地
37	下沢会館周辺遺跡	散布地	79	妙連寺山古墳	堤	127	鹿嶽山經塲	地
38	向山城跡	城跡	80	淨土寺山城跡	古城	128	葉光寺跡	地
39	下沢遺跡	散布地	81	地藏堂北横穴墓群	橫穴墓	129	越前燒窯跡	地
40	久徹園横穴墓	横穴墓	82	地藏堂横穴墓群	墓	130	磐瀬寺古墓	地
41	平家丸城跡	城跡	83	栗毛城跡	跡	131	坂	地
42	樺野祐平窯跡	窯跡	84	龜田谷遺跡	散地	132	坂	地
43	大急寺古墳	古	85	深田谷横穴墓群	穴坑	133	赤塚台場跡	地
44	塙山古墳	古	86	浅柄古墳	古			
45	神戸寺境内施設	寺院跡		浅柄南古墳	古			

第1表 出雲市及び周辺地区遺跡一覧

第5図 豊伊川放水路事業附削跡分布図



「」されるものに、近時放水路事業の調査で環濠を伴う集落遺構が確認された古志本郷遺跡や、出雲バイパス建設に伴って確認され、多量の木製品類が出土した姫原西遺跡などがある。また、後期になって斐伊川沿いの西谷丘陵に営まれた四隅突出型墳丘墓群からは、吉備型や北陸系と考えられる土器が出土しており、この時代の他地方との広範な交流の跡が知られて興味深いものがある。

続く古墳時代は、あまり集落遺跡が解明されていないが、平野南部の低丘陵地とその縁辺部には多くの古墳・横穴墓群が存在することで知られている。今市大念寺古墳・上塙冶築山古墳・地蔵山古墳などはその代表例として著名であり、他にも以下の後期古墳文化を代表するような古墳や横穴墓群がこの地域一帯に集中または点在している。そのうちの一つで上塙冶地区に所在する上塙冶横穴墓群は、県下最大規模を誇る横穴墓群であり、その数300穴ともいわれているが、放水路事業に伴って大半が事前調査される。皮肉にもこの調査で貴重な多くのデータが得されることになるとはいえる、規模といい、内容といい、その存在価値は保存してあまりあるものである。また、横穴墓群は、斐伊川（大津）側にも存在し、周知のものでは権現山横穴墓群や長迫横穴墓群がある。

横穴墓も7世紀前半をピークにして造営されなくなり、やがて古墳時代も終焉を迎えることになるが、他方で仏教の受容に伴い、仏教寺院の建立や火葬骨を納めた古墓などが出現するようになる。骨蔵器関係では、平野の南側丘陵地帯に菅原古墓・朝山古墓・小坂古墳内石櫃（銅製骨蔵器）や、西谷丘陵での採集地が知られており、火葬の広がりを認めることができる。また、古代寺院では、県内最古級ともされる神門寺境内廃寺や、放水路予定地にも近い位置にある長者原廃寺の存在が注目される。律令制下の出雲平野の歴史は、全国で唯一完本として残る『出雲國風土記』があるとはいえる、不分明なところが多くあり、遺跡としても数少ない現状である。そうした中にあって、墨書き器など

No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	大井谷石切場跡	石切場跡	20	第20支群	横穴墓	11	寿昌寺跡遺跡	散布
2	三田谷遺跡群	散布地	-21	第21支群	横穴墓	12	吉門寺西跡遺跡	散布
3	上塙治横穴墓群	横穴墓	-22	第22支群	横穴墓	13	地蔵山古墳	古
-1	第1支群	横穴墓	23	第23支群	横穴墓	14	半分遺跡	散布
-2	第2支群	横穴墓	-24	第24支群	横穴墓	15	半分古墳	古
-3	第3支群	横穴墓	-25	第25支群	横穴墓	16	出雲T業西遺跡	散布
-4	第4支群	横穴墓	-26	第26支群	横穴墓	17	池田遺跡	布
-5	第5支群	横穴墓	-27	第27支群	横穴墓	18	宮松遺跡	散落
-6	第6支群	横穴墓	-28	第28支群	横穴墓	19	神門寺付近遺跡	布
-7	第7支群	横穴墓	-29	第29支群	横穴墓	20	上塙治小学校付近遺跡	散
-8	第8支群	横穴墓	-30	第30支群	横穴墓	21	弓原遺跡	散
-9	第9支群	横穴墓	-31	第31支群	横穴墓	22	高西遺跡	布
-10	第10支群	横穴墓	-32	第32支群	横穴墓	23	光明寺南遺跡	散
-11	第11支群	横穴墓	-33	第33支群	横穴墓	24	光明寺古墳群	古
-12	第12支群	横穴墓	-34	第34支群	横穴墓	25	菅沢古墓	寺
-13	第13支群	横穴墓	-35	第35支群	横穴墓	26	長者原廃寺	院
-14	第14支群	横穴墓	-36	第36支群	横穴墓	27	間房岩跡	路
-15	第15支群	横穴墓	4	半分城跡	城	28	権現山横穴墓群	穴
-16	第16支群	横穴墓	5	半分瓦窓跡	窓	29	権現山古墳	古
-17	第17支群	横穴墓	6	人井谷城跡	城	30	長廻遺跡	散
-18	第18支群	横穴墓	7	菅沢古墳	古	31	長迫横穴墓	横
-19	第19支群	横穴墓	8	上塙治築山古墳	古	32	来原古墳跡	水路

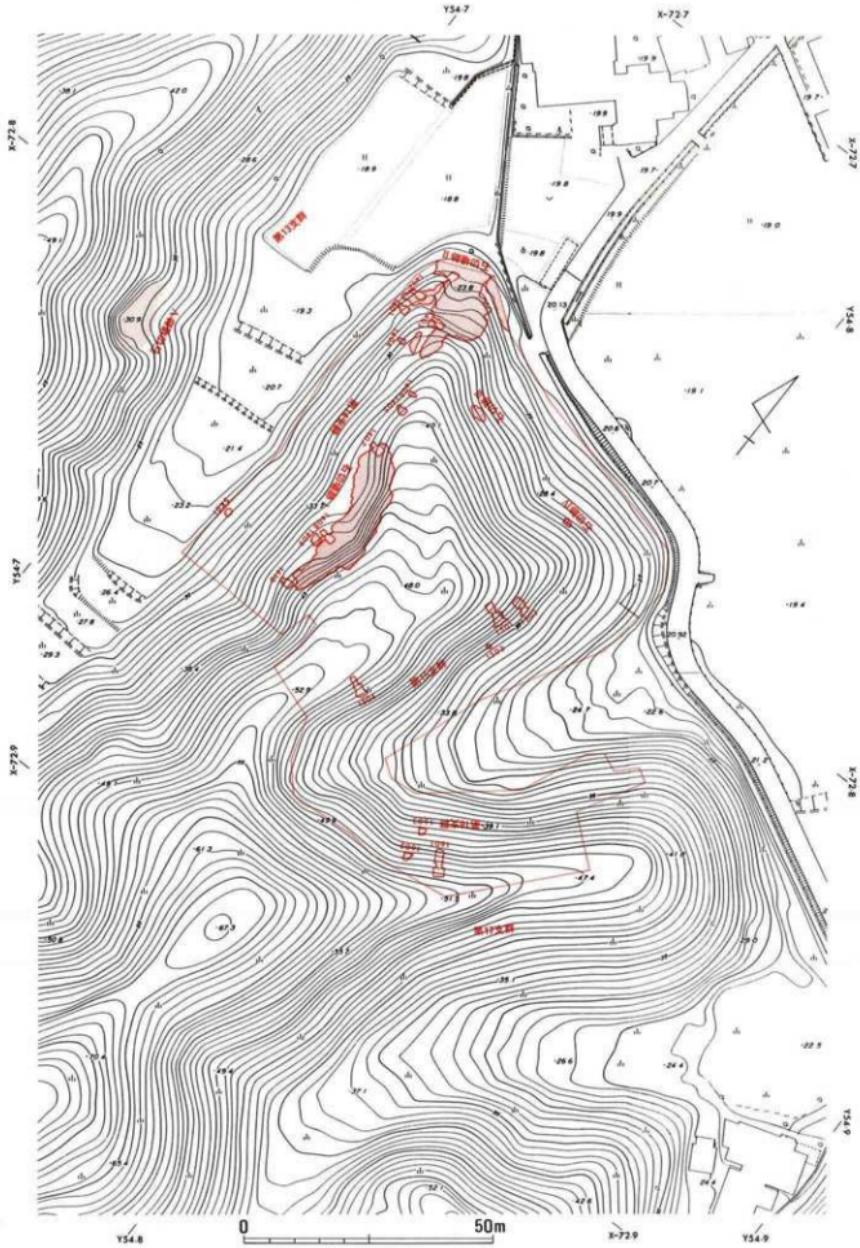
第2表 斐伊川放水路事業開削部周辺の遺跡一覧

が出土したことで知られる天神遺跡や、近年放水路事業に伴って木簡・墨書き器・帶金具・綠釉陶器などをはじめ多くの上器類・木製品類が出土した三田谷Ⅰ遺跡は、この時代の官衙的色彩をも帯びた遺跡として注目される。

中世に入ると、平野を開む丘陵地帯には、多くの山城跡が存在する。上塙治地域にあっては、かって一部発掘調査が行われた大井谷城跡や半分城跡が、今回の放水路事業に伴ってさらに調査されることになり、検出遺構や出土遺物によって山城跡の実態がさらに明らかになるものとみられる。また、この時代の居館跡や集落跡の調査では、これまで矢野遺跡ぐらいしか知られていなかったが、近時の出雲バイパス建設に伴う蔵小路西遺跡の調査では大規模な居館跡が発見され、当地の在地土豪である朝山氏の館跡である可能性が極めて高いとされた。本遺跡の発掘調査は、とかくこれまで塩冶氏中心にしか語られてこなかったこの地域の中世史像を見直すきっかけとなるものである。

近世以降になると、遺跡として発掘調査されたものは稀である。この放水路事業に伴って、古志本郷遺跡からは近世陶磁器類が山上しており、付近に集落が存在したことが知られる。近世産業史または開発史上の貴重な遺跡に、現在でも利用されている斐伊川側の来原の岩檻があるが、今後とも保存すべき重要な遺跡であろう。同じ産業遺跡に数えられる、本書の大井谷石切場跡は、かって当地域の人々が石をどのように利用していたかを知るうえで貴重な資料を提供したように思われる。

以上、出雲平野部周辺の歴史的環境について極かい抜まんで述べてきたが、この放水路事業が予定された地域は、出雲平野部にあっても各時代に亘る遺跡が数多く存在する位置にあることが知られよう。事業予定地の調査では多くの成果がもたらされると期待されるが、一方でこれにより遺跡が消滅する運命にあるのもまた事実である。地城住民が歴史を真に自分たちのものにするためにも、この調査が十分かつ細心に行われることを誰もが確認し合い、かつ、その成果を共有したいところである。



III 大井谷石切場跡の調査

調査の概要

大井谷石切場跡は、大井谷の中ほど、北側に伸びる小支丘陵の西側斜面から北側斜面にかけて存在する、凝灰岩（一部砂岩を含む）の石切場跡である。調査した4カ所はすべて露天掘りされた跡であった。樹木伐採後の分布調査の段階で、丘陵の上位では長さ25mほどにわたって石切場跡の平坦面が広がっているのが確認され、丘陵先端部でも階段状の石切場跡を認め、一部では岩盤が露呈して石切りの痕跡が確認できる状況にあった。また、規模の程度は不明であったが、北側斜面においても石切り跡の存在が2カ所認められた。

調査の方法は、まず、石切場跡の土砂・碎石の堆積状況を把握するためにトレントを設定して人力で調査した。その後は作業の効率や高所での危険度を考慮して、重機によるおおまかな掘削作業（堆積土石の除去と移動）を行い、そのち再び人力で遺構面の精査を行った。

調査の結果、当初から石切り箇所がほぼ特定されていたとはいえ、丘陵上位から先端部にかけて比較的大きい石切場跡2カ所（上方をI地点、下方をII地点と呼ぶ）と、北側斜面にごく小規模な石切り跡2カ所（西側からIII地点・IV地点と呼ぶ）、あわせて4カ所の石切り場跡を検出した。出土遺物は、わずかではあったが、陶磁器数点と鉄製品ヤ（クサビ）4点を採集した。なお、完掘後の測量は、III地点とIV地点については手測りを行い、I地点とII地点では適宜縮尺20分の1の手測りの断面図を作成したのに加えて、全体としては空中写真撮影により、上塙治横穴墓群第14支群とともに縮尺20分の1、5cmコンタの平面・立面図を作成した。

I 地点の遺構と出土遺物

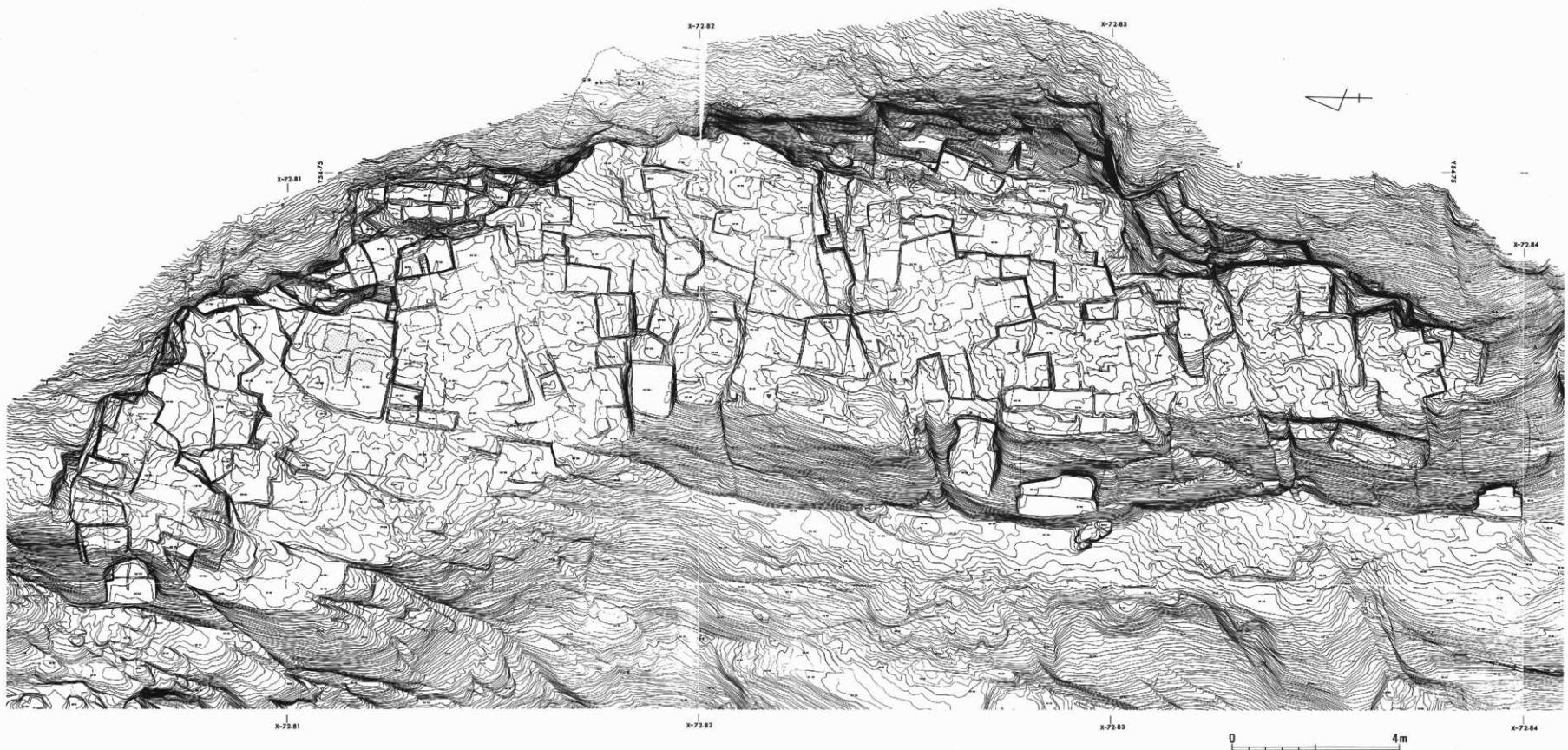
概要と規模（第6～8図、図版6）

I地点は、丘陵の上方に位置しており、直下の谷底部からは16mほどを測る。標高は、南端で約40m、中央部で約37m、北端で約36mである。尾根筋に近い凝灰岩の岩盤層に露天掘りされた跡で（北側の一部に洞窟掘り風のところがある）、尾根に平行して南北方向に長く切り出されている。規模は、南北の長さが約35m、幅（奥行き）は北側で7.5m、中央部で8.8m、南側で3.6mほどあり、壁面の高さは北側で4.8m、中央部で5.2m、南側で3.4mほどを測る。

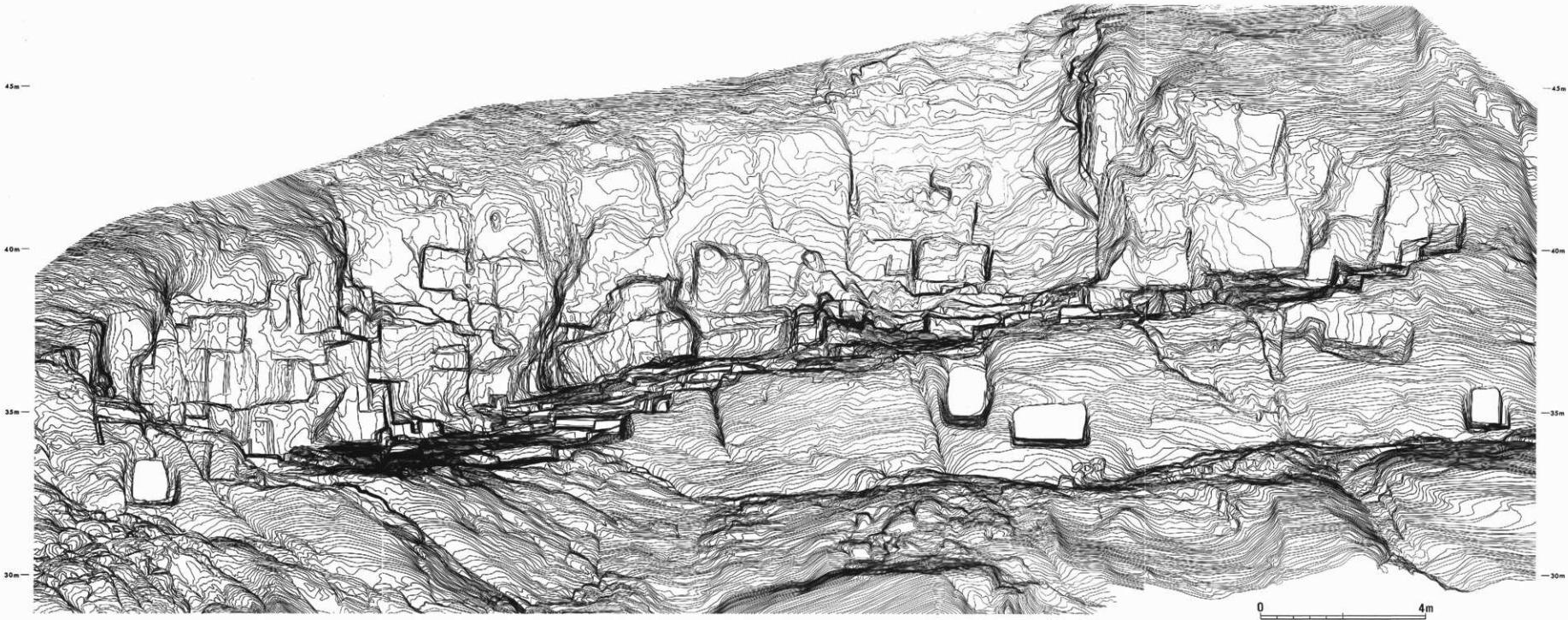
調査前から一部に切り出した跡とわかる岩盤が露呈し、全体としては長さ25mにわたって平坦面が認められていた。調査はまず、およそその土砂の堆積量と切り出し状況を把握するため、この平坦面のほぼ中央の位置に尾根と直交するかたちで幅2m、長さ13mのトレント一本を設定して行った。

トレント調査（第9図、図版12）

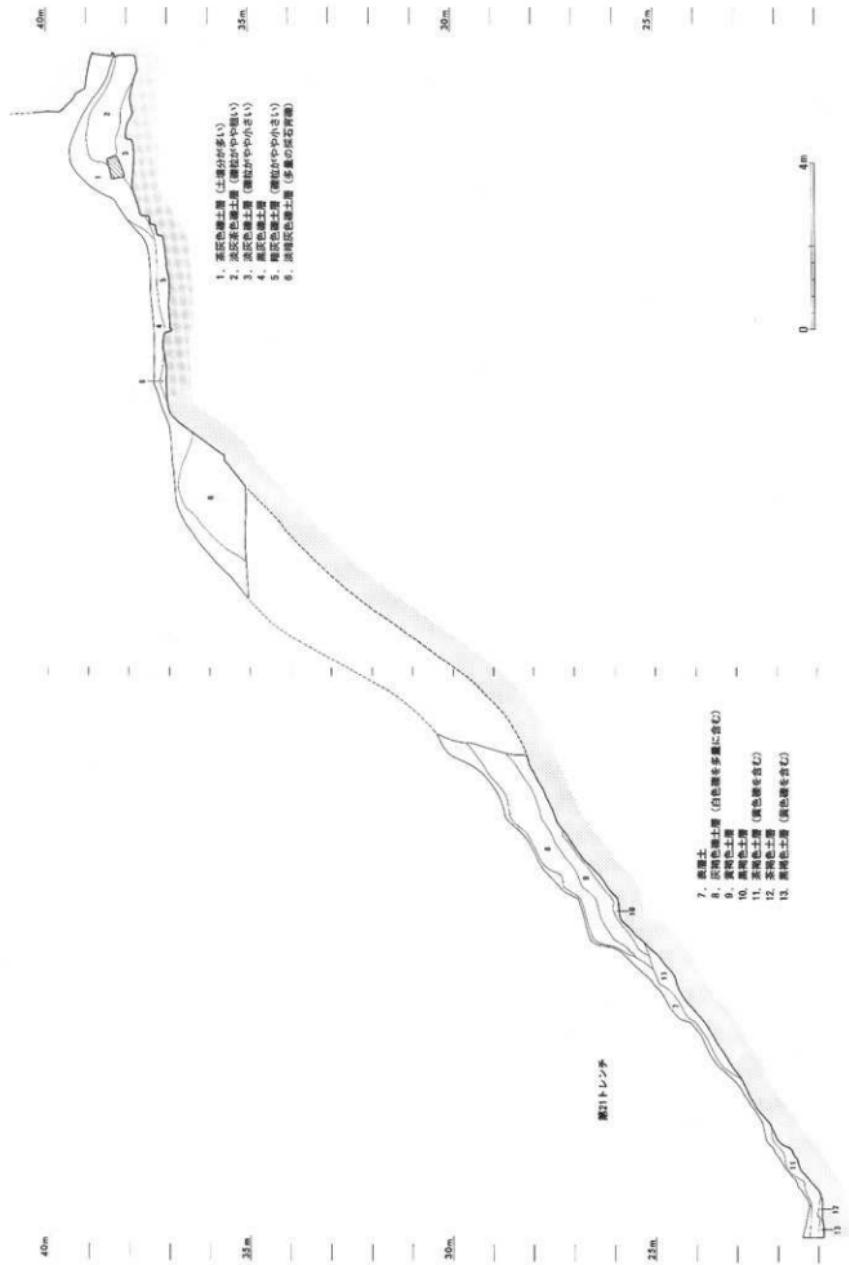
この調査の結果、平坦部の場合、山側では山形に厚く堆積していることが分かり、もっとも厚いところでは1.6mほどの堆積が認められた。また、谷側では平均して40cmほど薄く堆積していることが分かった。堆積土は基本的に礫土であり、礫はさほど大きくななく、人頭大から拳大のものが多かった。山側で堆積土が厚いのは、切り出した壁面上方からの崩落土がもっぱら堆積したものと推定された。また、平坦面での堆積が少なかったのは、石を切り出した際に生ずる破碎石や屑石が基本的に谷部に



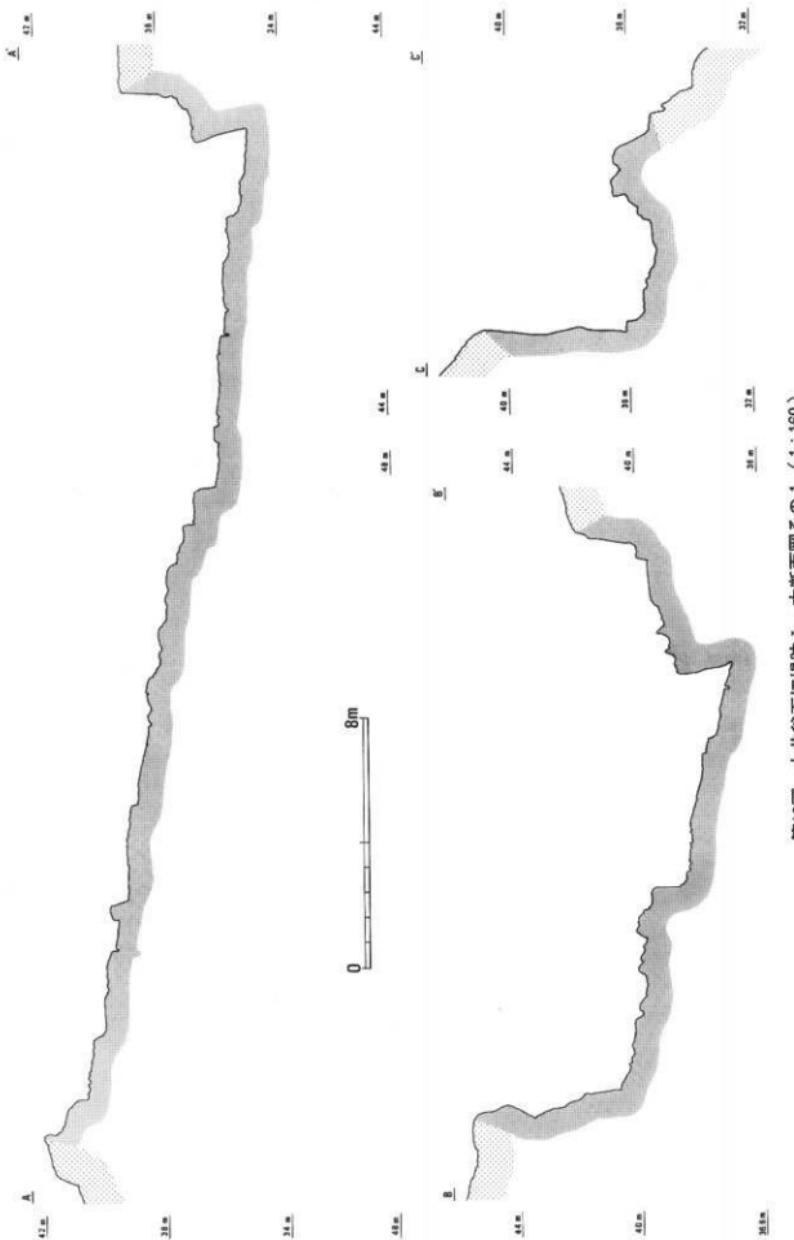
第7図 大井谷石切場跡 I・平面図 (1:80、●印；陶磁器出土地点、▼印；ヤ出土地点、アミカケ；スヌ付着面、破線部分；方形石製品出土推定地点)



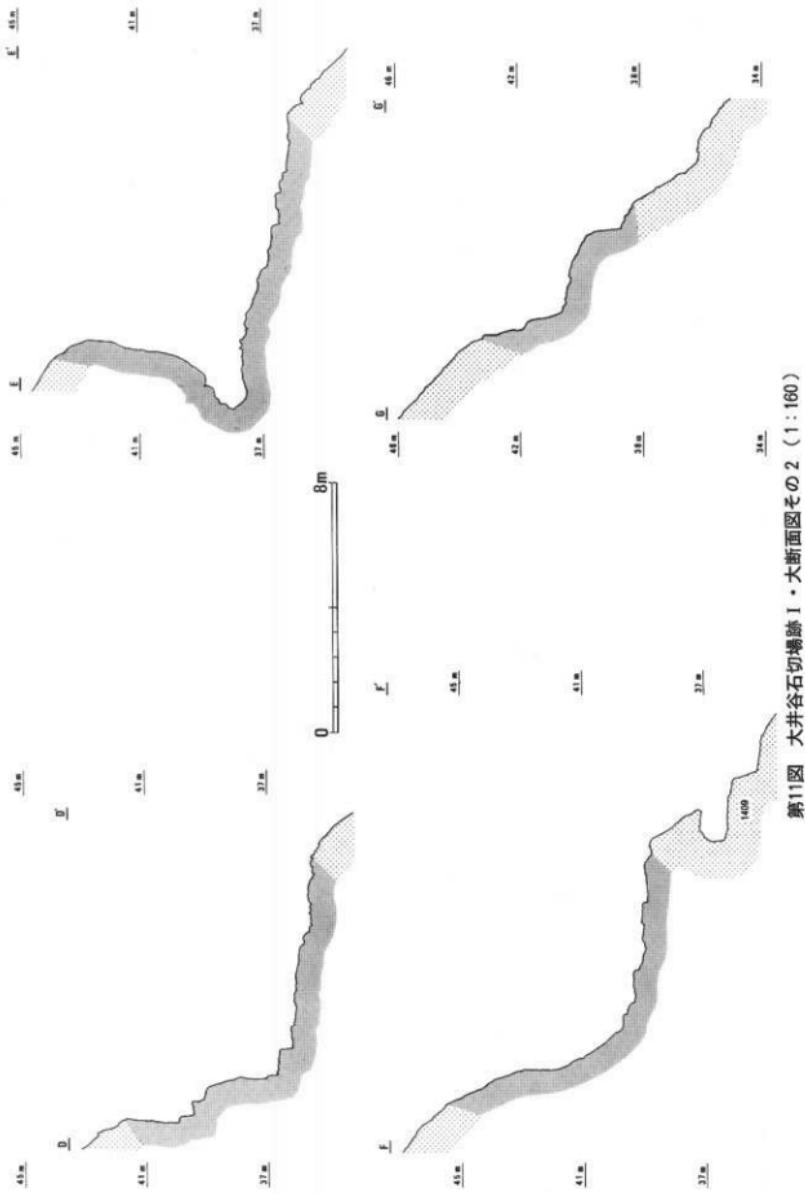
第8図 大井谷石切場跡 I・立面図(1:80)



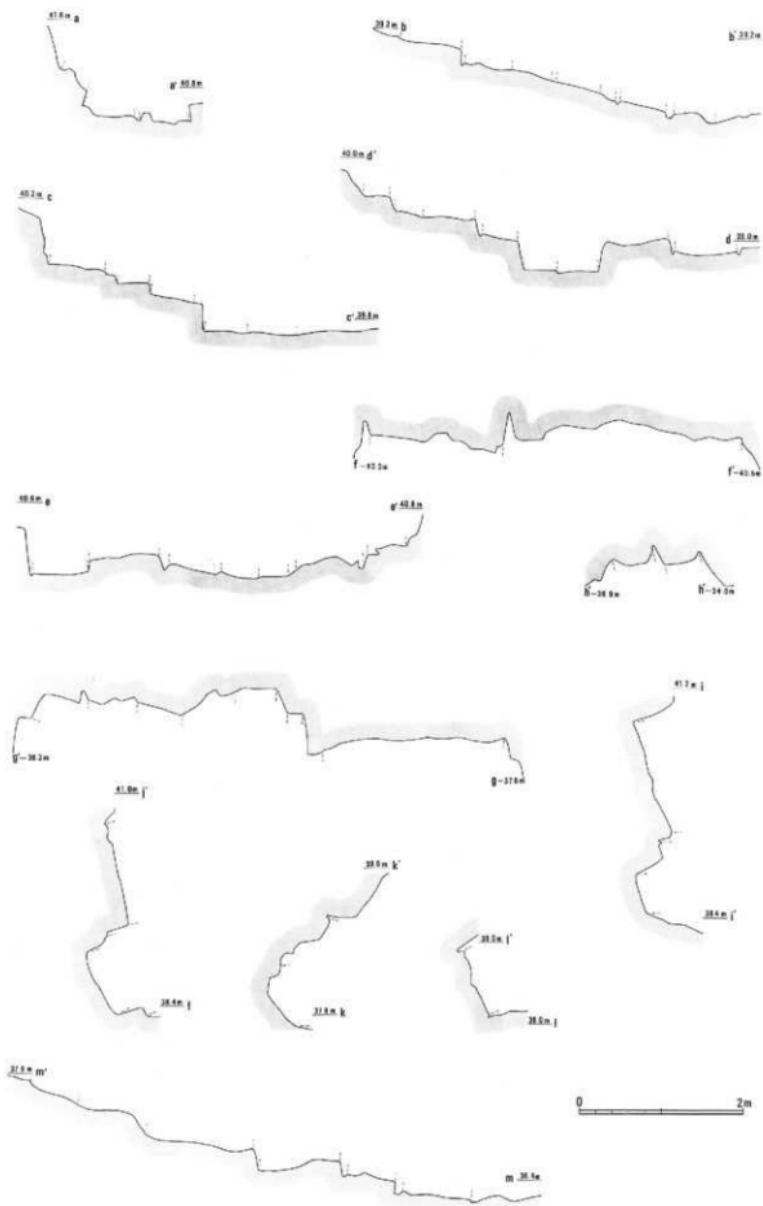
第9図 大井谷石切場跡 I・土質断面図 (1:120)



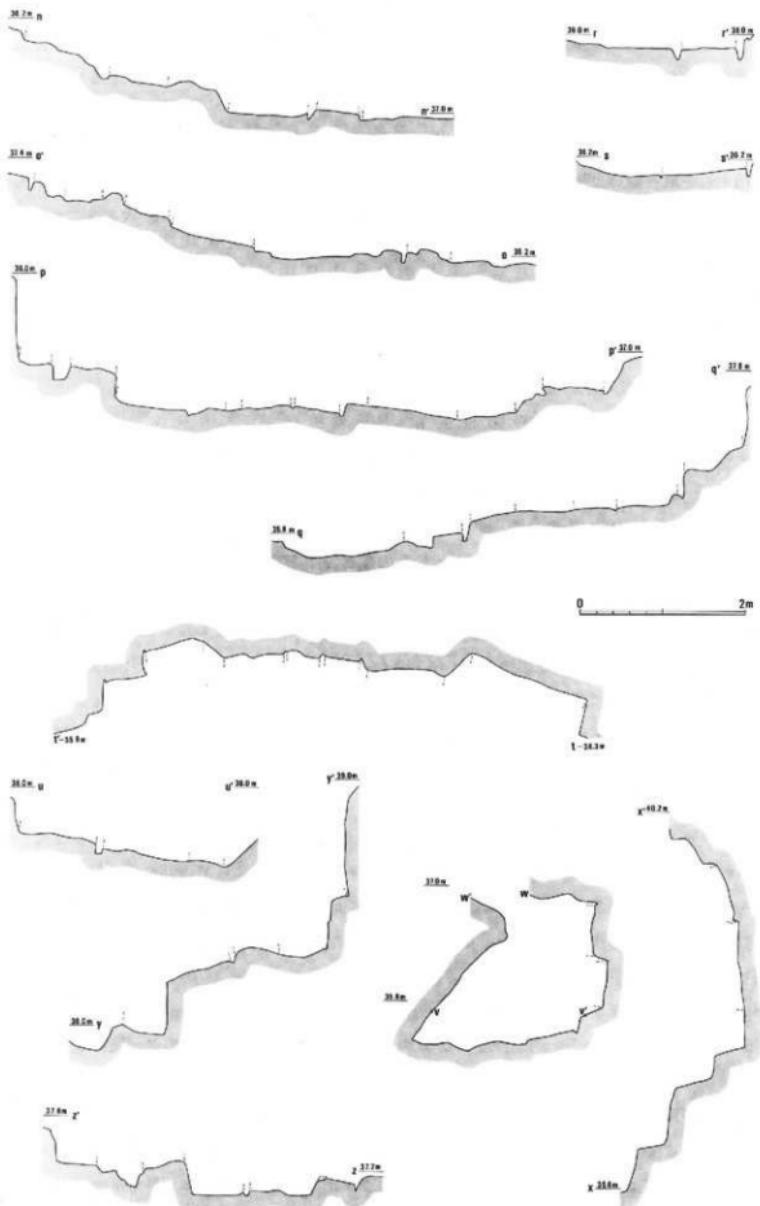
第10図 大井谷石切場跡1・大断面図その1 (1:160)



第11図 大井谷石切場跡 I・大断面図その2 (1:160)



第12図 大井谷石切場跡 I・小断面図その1 (1:120)



第13図 大井谷石切場跡 I・小断面図その2 (1 : 120)

落とされていたことによるものと推察される。事実、平坦面から谷部に落ちる斜面の直後では（斜面に直交する形での堆積の厚さ）1.8mほどの堆積が認められた。また、この右切場跡の下方に設定した斜面のトレンチでは（第21トレンチ、平成4年度実施）、標高29m付近で1.8m、さらに標高26m付近でも40cmの堆積が認められた。

石切りの痕跡とその技法

堆積上石を取り除いた後の石切場跡をみると、方形の切り出し痕跡が明瞭に認められ、それもある一定の大きさの石材を切り出していたことが分かった。やや繁雑になるが、その大きさについて幾つかのグループに分けてその数値を示すと、

- ① 46×50・45×60・50×54・50×66・60×68cmなど
- ② 85×90・70×88・84×96・80×104cmなど
- ③ 100×100・100×120・120×120cmなど
- ④ 38×78・35×87・37×87、43×90cmなど
- ⑤ 48×100・50×100・60×102・60×120・74×100cmなど

以上のような結果が得られたが、およそ①グループのように、一辺50～60cm角のもの、②グループのように、一辺70～90cm前後のもの、③グループのように、一辺100cmほど、ないしはそれ以上のもの、④グループのように、40cm前後×80～90cm前後の直方体状のもの、⑤グループのように、同じ直方体でもやや大ぶりな50～60cm×100～120cmのものなど、ここではおよそ5種類ほどの寸法の切石が認められた。

また、切り出した跡の岩盤をみると、風化により切り出しの痕跡を止めないところもあるが、たいがい2つの種類の工具の痕跡を認めることができた。一つは、各側壁面に残された筋状の痕跡で、ほぼ垂直方向か斜め方向に連続してみられるものであった。この場合の工具の先端部は、尖った角錐状を呈している特徴がある。もう一つは、底面（側面の場合もある）の一辺側に残されたほぼ一定間隔で水平方向に打ち込まれたやや刃幅のある痕跡で、刃幅は1.5～3.5cm、長さ4.0～10cmほどであった。前者の痕跡は、ツルハシ状の工具によるものとみられ、箱型の石材を取るために必要な大きさの深さまで周囲（隣り合う二辺または三辺方向）に溝を巡らした際の痕跡であると考えられる。また、後者は、いわゆるヤ（クサビ）の痕跡であり、前者のツルハシ状工具によって周囲に溝を切った後、その石材を岩盤から切り離すため（正確には割り離す）、底面の一辺に打ち込んだ時の痕跡とみられる（第64図参照）。こうした石切りの方法は、溝切り技法と呼んでよいものである。

切り出しへは、この手法で、効率よく作業しやすいように手前から順次切り取ったものとみられるが、なかには、c-c'ラインとd-d'ラインとの交点付近では、1.1m×1.2m四方のなかに54×48cm・54×58cm・52×54cm・40×56cmを測る、小ぶりの岩塊を連続的に切り取った痕跡が読み取れた。

矢の痕跡

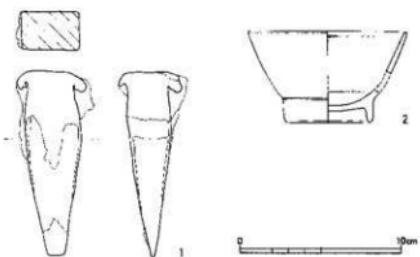
石切りの痕跡には、ツルハシ状の工具痕跡とともに、矢の痕跡も認められたが、このヤ（クサビ）の痕跡について少し詳しくみると、箱型長方形の場合、長辺側に打ち込んであり、確認できるもので幾つかの例を示すと、長辺70cm・短辺44cmでは18・22・16・14cm間隔の3本、長辺80cm・短辺60cmでは12・14・18・21・15cm間隔の4本、長辺87cm・短辺35cmでは17・18・18・16・18cm間隔の4本、長辺100cm・短辺48cmでは20・22・22・26・10cm間隔の4本、長辺100cm・短辺50cmでは22・20・22・26・

10cm間隔の4本、また、切り取りに失敗した例かとみられる長辺80cmのものでは18・16・16・16・14cm間隔の4本といった具合であった。これによると、必ずしも一定しないが、多くは16~26cm間隔を置いてヤを打ち込んでおり、その本数は長辺が70cm以下であると3本程度、80~100cmほどであると4本ほどになるものとみられる。

円形の切り出し跡

方形の切り出しの痕跡の中に混じって、確認できるものではわずかに1例であったが、円形に切り出したところが認められた。I地点の右切場跡のほぼ中央、n-n'ラインとp-p'ラインとの交点付近で、径は80~84cmである。切り出し方法は、痕跡がはっきりしなかったものの、箱型の方形切り出し手法と同じと考えられ、まずツルハシ状工具で周囲を円形に溝切りし、その後底辺に矢を打ち込んで切り離したものと推察される。なお、後述するように、II地点の石切場跡でも同様な円形切り出し跡が認められた。

第14図 大井谷石切場跡I・出土遺物実測図(1:3)

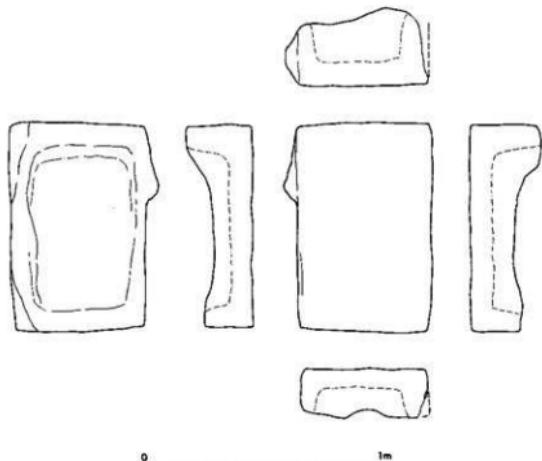


出土遺物とスス付着面(第14・15図、図版20・46)

出土遺物はごくわずかであったが、鉄製品1点、陶磁器1点、片面にくりこみが施された水盤風の石製品1点がある。

鉄製品は、基部に比べ刃幅の狭いヤ(クサビ)である。最大長は11.7cmで、刃幅1.0cm、基部先端幅2.8cm、同最大幅3.4cm、基部最大厚2.6cmである。出土地点は、I区のはば中央、谷側の崖面に面したところで(1408横穴墓より北側に4・5mの地点である)、基部を7.0cm残してほぼ垂直に打ち込んで

あった。陶磁器は、推定口径9.8cm、底径5.5cm、推定器高6.0cmほどの、肥前系の広東型碗である。内面は、見込み部に絵文様を描き、かつ、それを囲むように少なくとも一重線を巡らす。口縁端部にも二重線を施す。外面には、体部と高台との境に一重線を巡らし、その上部に絵文様を描いている。時期は、19世紀前半とみられる。山



第15図 大井谷石切場跡I・出土石材実測図(1:20)

土地点は、北寄りのほぼ中央（q-q' と r-r' ラインの交点付近）、切り出した岩盤のほぼ直上（約3cmほど浮いた状態）の淡灰白色礫混じり土から出土した。この陶磁器が出土した地点から北側に約1mの至近距離のところでは、約1.2m四方にわたって薄く煤が付着し、火を受けたとみられる部分が認められた。

片面に切り込みが施された手水鉢風の方形石製品は、最大長85cm、最大幅56cm、最大厚35cmを測り、片面に幅8~12cmほどの縁をたてて中を深さ10~19cm、厚さ13cmほどに切り込んだもので、もう一面は平坦に仕上げられている。内面の加工はやや粗く、仕上げ調整が反対の面ほど施されていない。用途は特定できないが、手水や焼き入れ用の水盤具であった可能性が考えられる。正確な元の位置をおさえることができなかつたが、この石製品も前述の陶磁器やスス付着面からはさほど離れていない西側の地点から出土しており、これらの出土状況を考え合わせると、この部分には石切り用の工具を手入れする鍛冶をするスペース、もしくは湯茶を飲む休憩スペースがあったのではないかと推定される。

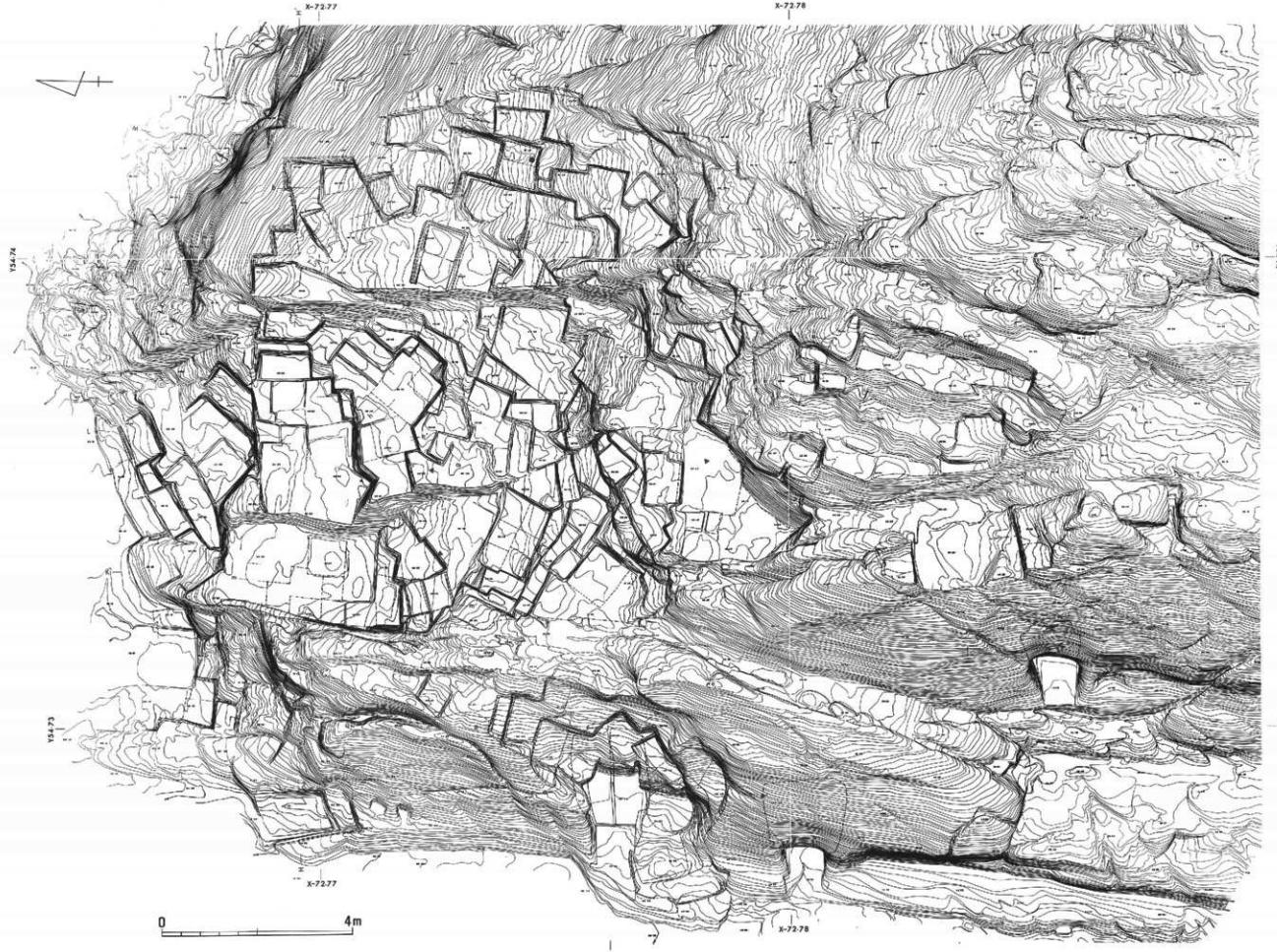
II 地点の遺構と出土遺物

概要と規模（第16・17図、図版7）

II地点は、尾根の北側先端裾部に認められた凝灰岩の石切り場跡である。分布調査の段階から知られた遺構で、露天掘りの跡が一部階段状に露出していた。調査の方法は、I地点とほぼ同じであり、まずトレント調査により土砂・石のおよその堆積状況を人力で把握した後、重機により大方の堆積土の除去を行い、終わって再び人力で遺構面の精査を行った。

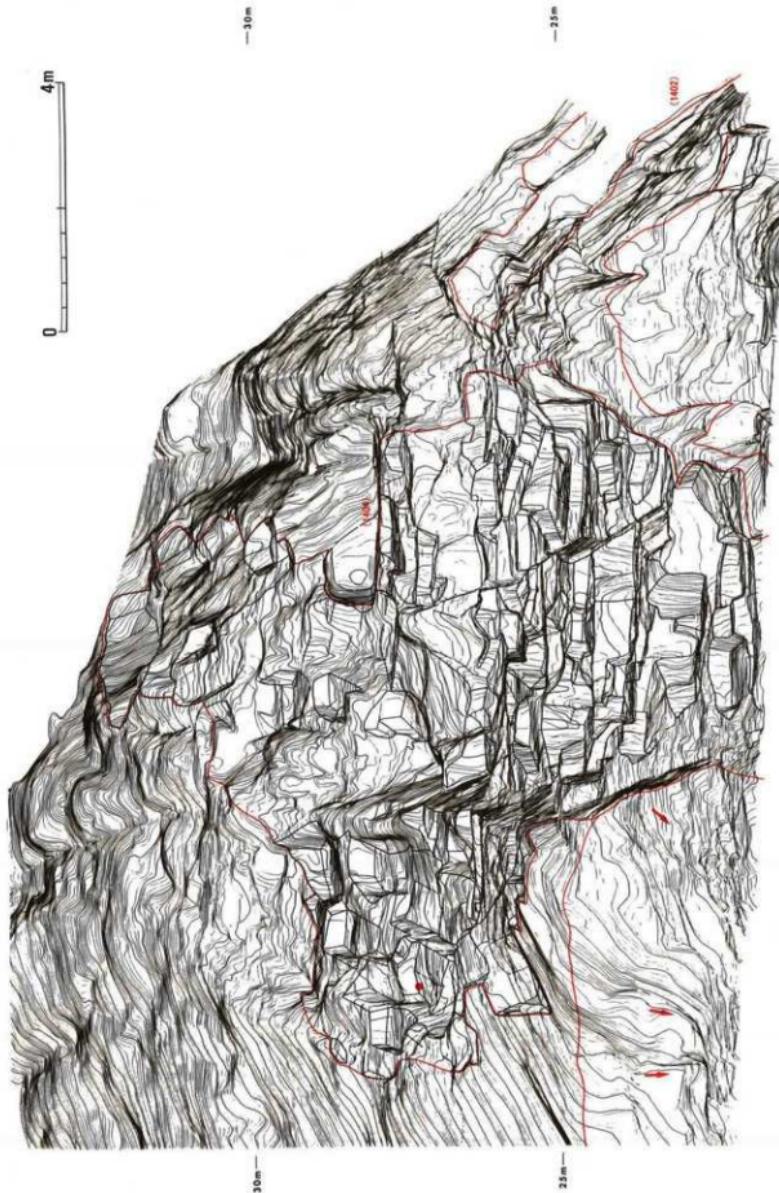
規模は、最も明瞭な中央部分で東西幅約12m、南北幅（奥行き）約14mを測り、全体としては北側先端で幅約11m、最も広いところで東西幅約18m、南北幅（奥行き）約20mの範囲に及んでいる。切り出し跡は、南北方向にはほぼ並んで走る大きな3つの摺理面を中心にして行われた中央部分（標高21.5~27.5m付近）と、さらにその北側の調査区端までの部分（同21.5m付近）、南側の斜面部分（同29.5~32.5m付近）、東側の一級高くなつた斜面部分（同25.5~28.5m付近）、および西側に回り込んだ部分（同22~25m付近）と、おおきく5ブロックに分けられる。また、東側にはこの石切り場跡と接するように黒色火薬による採石跡も存在する。

中央部分は、岩盤地面に対して垂直方向に切り出した階段状の切り出し跡が明瞭である。規模は北側で幅（東西）5m、中程で同7m、奥行き（南北）12mである。これより東側の摺理面より一段高い東側部分は、最大幅（東西）4m、奥行き（南北幅）9mの範囲で、ここでは岩盤斜面に対してほぼ直角に切り出されている。北端部は、東西幅7mほど切り出されているが、調査対象地一杯にまで石切りが行われており、実際はさらに崖下の水田面まで及んでいるものと思われる。また、摺理面から西に向かう部分でも小規模ながら行われており、さらに南側に5m離れて約4m×2m四方の範囲でも行われている（これにより横穴墓1402号穴が半分程度破壊されている）。丘陵上に向かっての南側部分は、横穴墓1403号穴付近でいたん途切れ、それより山側で5×7mの範囲で点々と小規模な石切り跡が認められる。北東側は、摺理面で石切りが途切れているが、ここでは黒色火薬による採石跡が認められた。



第16図 大井谷石切場跡Ⅱ・平面図 (1:80. ●印：陶磁器出土地点、▼印：ヤ出土地点、↓印：黒色火薬詰穴痕)

第17図 大井谷石切場跡Ⅱ・立面図 (1:80、●印：陶磁器出土地点、↑印：黒色火薬詰穴跡)



トレンチ調査（第18図、図版13）

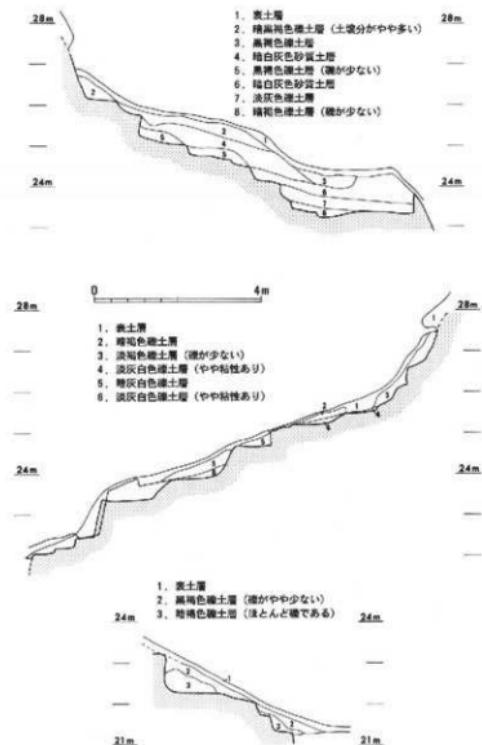
II地点のほぼ中央、南北方向におよそ上下2段にわけて行った。その結果、上方では全体として堆積疊土が浅く、浅いところでは10cmほど、深いところでも40~50cmほどであった。全体に礫混じり（量は少ない）の表層土が覆い、下位に暗灰白色・淡灰白色、ないしは暗褐色を呈した礫混じり土層が認められた。下方では、やや厚く堆積し、平均80~90cm前後で、深いところでは120cmほどの堆積が認められた。ここも全体として10~15cmほどの表層土が覆い、その下位におおよそ暗灰白色・淡灰色・暗黒褐色を呈した礫混じり土層が堆積していた。基本的にこの礫混じり土は石切りに伴って排出された屑石およびその風化土と考えられる。土層観察のうえでは、特別の変化や数次にわたって堆積した状況は特に認められなかった。なお、調査区の北端は平坦に削られて道になっていたこともあって堆積は表層土のみであった。

石切りの痕跡とその技法

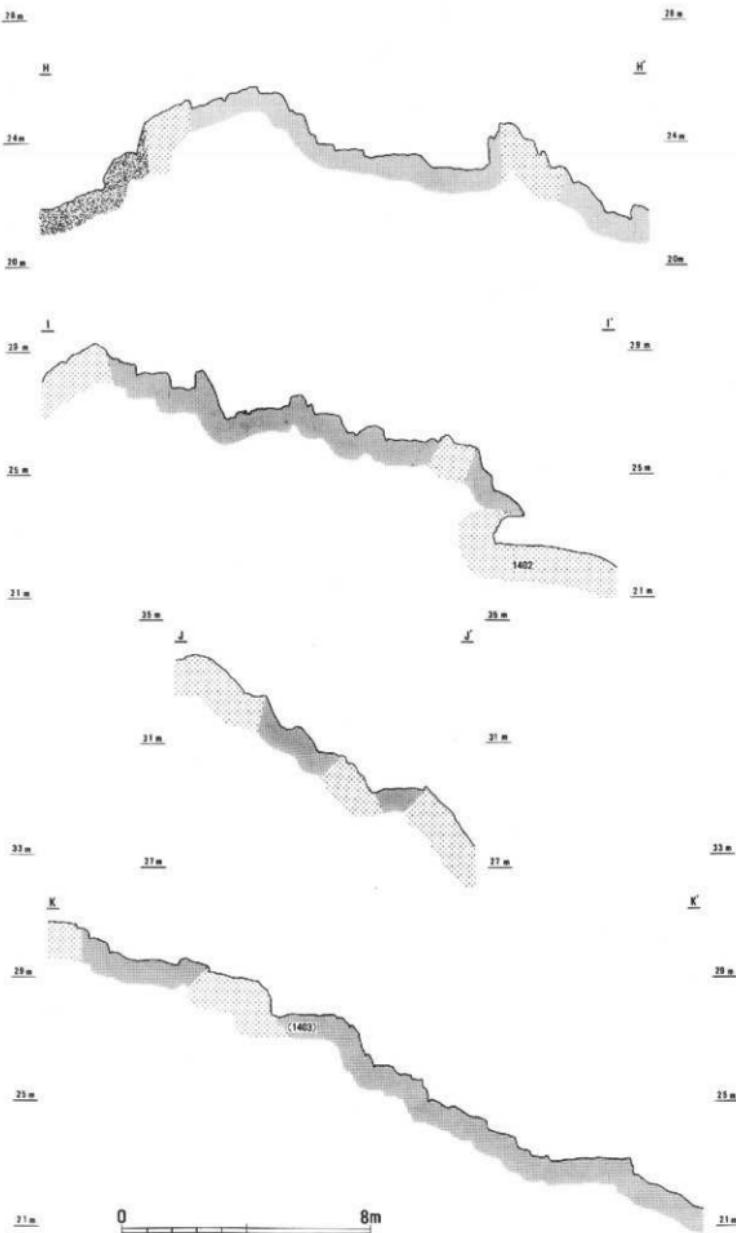
石切りの状況は、I地点とほぼ同じであることが確認できた。露天掘りで、基本的に方形の石切りを行っている。切り出し方法は、隣り合う二辺または三辺をツルハシ状の工具を用いて必要な深さに溝を切り、周囲の溝を掘り終えた段階で、底面に矢を打ち込んで割り離す手法がとられている。切り出し面は、中央部をはじめ大半は地面に対して垂直方向に認められたが、東側の一段高くなつた部分や、西側に回り込んだ部分では、岩盤の傾斜に対してほぼ直角方向に切り出したところが認められた。また、b-b'ラインとc-cライン'およびd-d'ラインの交点部分では、ほぼ同じサイズのものを3個ないしはそれ以上、連続的に切り取った痕跡が認められた。これは同じ寸法のものを効率良く切り出した痕跡と考えられる。

切り出しの痕跡から石材の大きさをみると、おおよそのような数値になる。

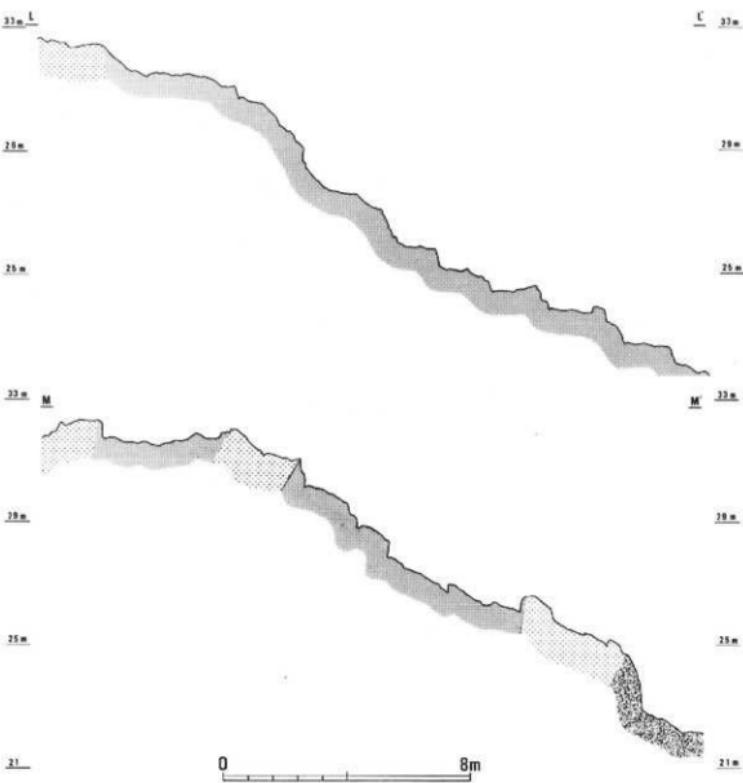
- ① 52×53・53×63・58×50・52×47・
53×46・50×58cmなど
 - ② 80×80・82×86・80×90cmなど
 - ③ 一辺98・一辺100・一辺102cmなど
 - ④ 42×86・52×96・56×101cmなど
- これによると、①グループのような、一辺50~60cm角のもの、②グループの



第18図 大井谷石切場跡 II・土層断面図 (1 : 120)



第19図 大井谷石切場跡II・大断面図その1 (1 : 160)



第20図 大井谷石切場跡 II・大断面図その2 (1 : 160)

ような、一辺80cm角前後のもの、③グループのような、一辺100cmほどのもの、④グループのような、40~50cm×90cm前後の直方形状のものなど、およそ4つのタイプの石が切り出されたものと推定される。

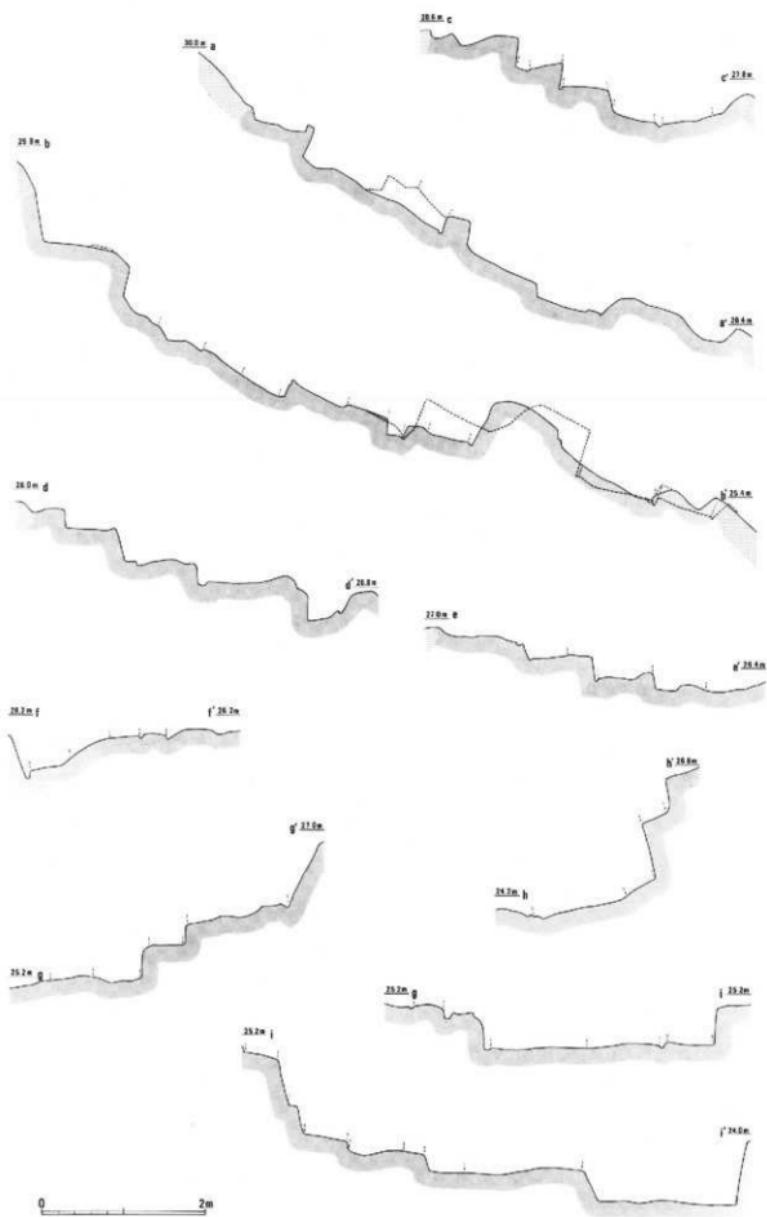
矢の痕跡についても、I地点とほぼ同様であった。

円形の切り出し跡（第31図、図版23参照）

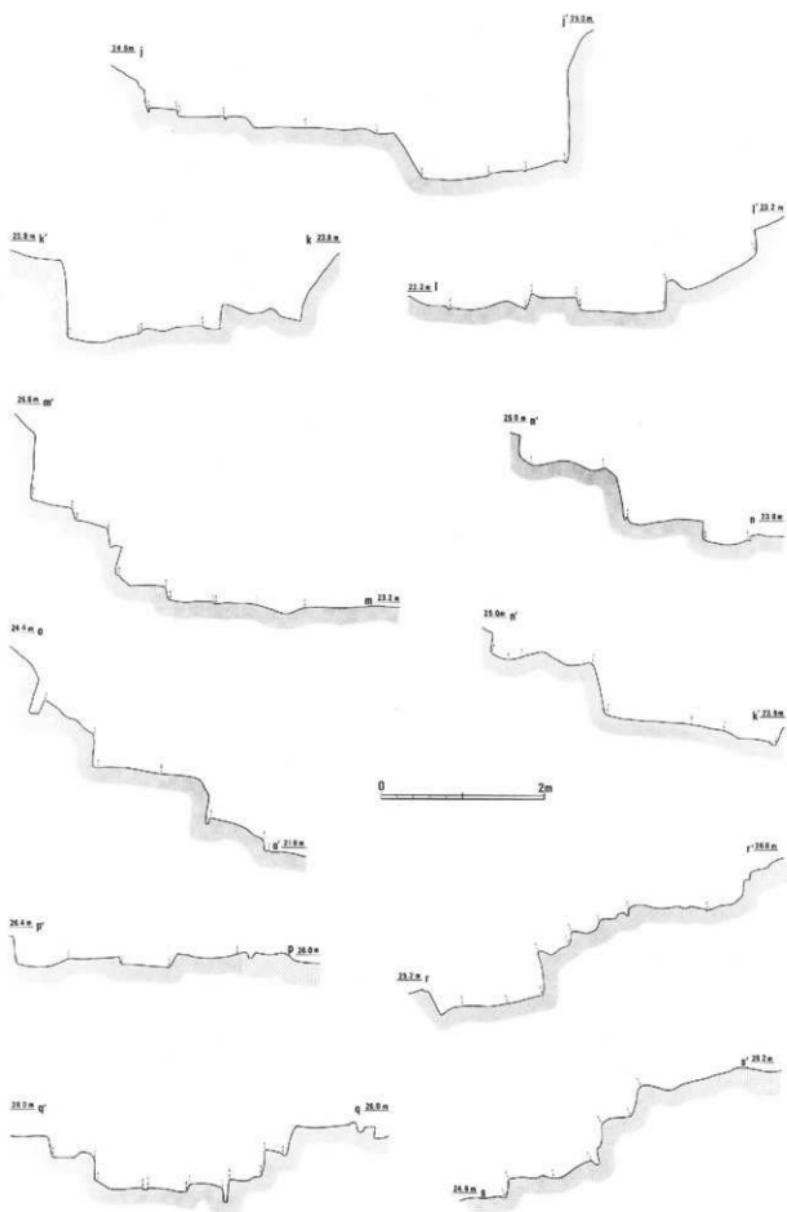
II地点の西側端、中心部の石切りが岩盤の摺理面のため一旦途絶え、再び小規模な石切りの跡が残る、横穴墓1402号穴付近で認められた。径94~100cmを測り、I地点で確認したものよりやや径が大きい。円形の石材は、どのように使用したかはっきりしないが、その形状や大きさからは（さらに中に例り込むなり例り貫くなりすると）、臼状のものや井戸枠などが想定される。

黒色火薬による採石跡（第29図、図版21）

ちょうど岩盤の摺理面を境にして石切りが途切れた北東角部分で、黒色火薬を用いた採石の跡が検出された。爆破された箇所は、ほぼ調査区の北端からはじまり東側の小川付近にまでおよんでいる。



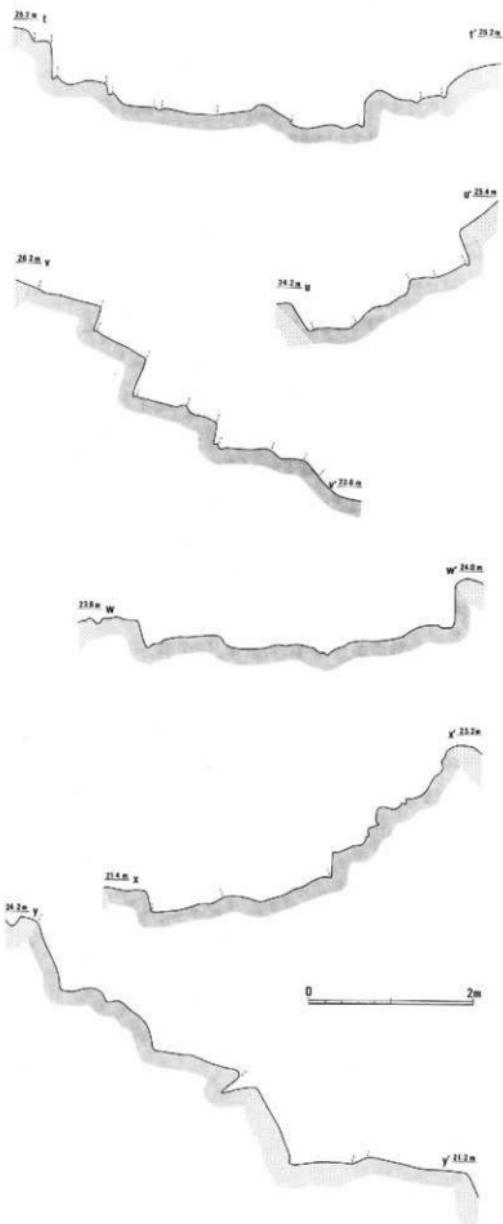
第21図 大井谷石切場跡 II・小断面図その1 (1 : 120)



第22図 大井谷石切場跡 II・小断面図その2 (1 : 120)

規模は、長さ約10mで、幅（奥行き）は定かではないが岩盤の自然傾斜度と採石された部分の傾斜度からすると、3mほどが爆破されたものとみられる。山側の傾斜面には、黒色火薬を詰め込むために空けられたボウリング跡がのこり、少なくとも7カ所が確認できた。この黒色火薬による採石は、聞き取り調査の結果、地元で親子三代にわたって石工業を営んできた加田氏によって昭和12・13年頃に行われた跡と分かった。ここで採石された石は、すぐ近くの河川護岸工事用の石として利用されたという。

加田泰蔵氏（3代目、大正8年（1919）生まれ）によると、黒色火薬は大正時代ごろから利用していたといい、採石の作業では先代および自分の代はノミ・ツルハシなどは使わなかつたという。爆破するための火薬を詰める穴は、2～3mの長さの六角の突棒を用いて空けた。爆破によりできた石を種石といい、これを必要に応じて小割りする。石垣用の石であれば（設計にもよるが）、45cm角とか35cm角ぐらいにしたが、その際ヤ（クサビ）とゲンノウを使って成形した。両端が尖ったツルハシは、ヤ（クサビ）を入れる穴（矢穴）を深さ5cmぐらい掘るときに使用したという。作業は現場で細工までを行い、ここから使用場所までの輸送は運送屋に依頼したという。こうした石工の仕事は、自身の場合昭和23年から同36年頃まで続けたという。



第23図 大井谷石切場跡II・小断面図その3（1:120）

出土遺物（第24図、図版20・46）

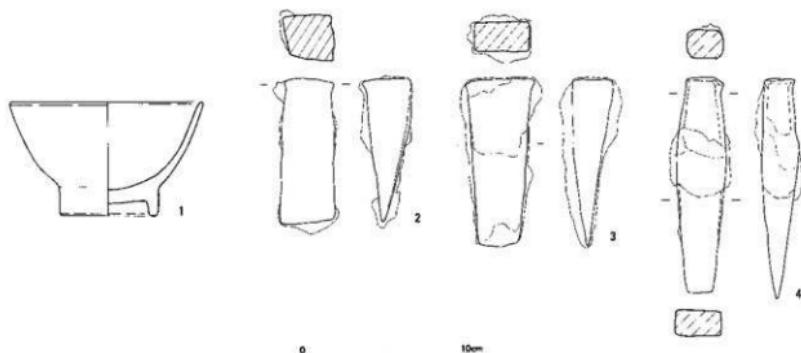
2地点から出土した遺物には、陶磁器1点、鉄製品3点があった。

陶磁器は、推定口径11.7cm、底径6.0cm、器高6.9cmを測る広東型碗である。内面には見込み部に波に岩を、外面体部には帆掛け船、波に柳文の島を描いている。肥前系であるが、久邑焼・伊東焼の可能性がある。時期は、19世紀前半とみられる。出土地点は東側斜面部（a-a' と d-d' ラインとの交点付近）であり、切り出した岩盤の床面から5cm浮いた状態で出土した。

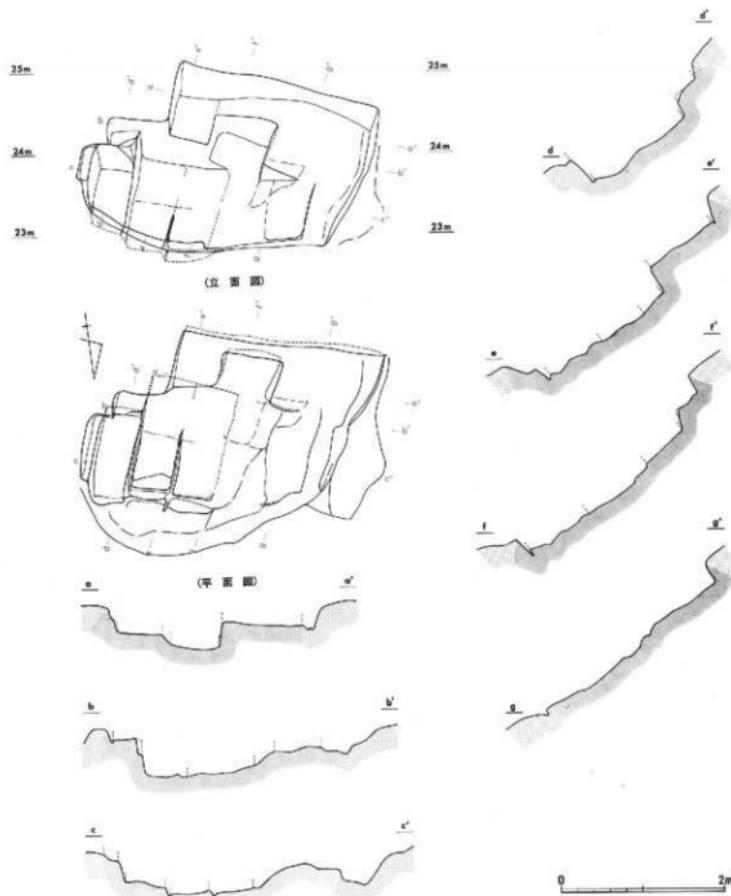
鉄製品は、ヤ（クサビ）であり、1は長さ8.9cm、刃幅3.4cm、基部幅2.8cm、最大厚2.8cmで、方形の基部にたいしてやや刃幅が広い。2は長さ10.2cm、刃幅2.5cm、基部幅4.0cm、最大厚2.5cmで、基部から刃部にかけて少しづつ先細りする。3は長さ13.1cm、刃幅1.6cm、基部幅2.1cm、最大幅3.0cm、基部厚1.7cm、最大厚2.2cmで、両端がやや細く作られるとともに、基部が面取りされている。出土地点は、1は中央部やや西寄り（n-n' と k'-n' ラインの交点直下）の切り出し跡から出土し、壁面より19cm、底面からは6cmほど浮いた礫混じり土中から検出した。2は天井部から側壁にかけて破壊されていた横穴墓1404号穴の玄室上部を覆っていた礫混じり土中より検出した。3は、ほぼ中央部（d-d' と m'-m ラインの起点付近）の切り出し跡の岩盤に打ち込まれていたもので、基部を5cm残し、岩盤に対しては斜めに打ち込んでいた。

III 地点の遺構（第25図、図版18）

丘陵北側斜面の西寄りに認められた小規模な凝灰岩の石切り跡である。石切場跡II地点からは東に15m、同VI地点からは西に27mほどの距離がある。調査前から一部切り出し跡が露呈しており、上砂の堆積はほとんどが表層十で、深いところでも20~30cmと浅かった。規模は、幅（東西方向）3m、奥行き（南北方向）2.5mで、自然岩盤面からの深さは最も深いところで60cmほどであった。標高は、23~25mのところである。岩盤斜面に対して直角方向に切り取られ、一辺50~60cm×60~90cmほどの方形石切り跡が認められるが、その数は10個にも満たないよう推定される。特に西側では岩盤のクラックとともにやや軟質の傾向がみられ、量が十分取れなかっかとみられる。



第24図 大井谷石切場跡II・出土遺物実測図（1：3）



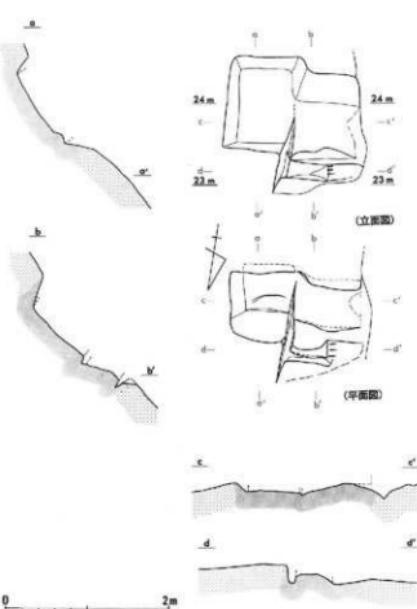
第25図 大井谷石切場跡III・遺構実測図 (1 : 60)

切り出し跡には、刃幅1.5cmで長さ7~10cmほどのヤ(クサビ)の痕跡が、85cmの長辺側に対して14~18cm間隔で4本認められた。なお、遺物などは検出されなかった。

IV地点の遺構 (第26図、図版19)

丘陵北側斜面の東寄りに認められた最も小規模な石切り跡である。岩質は、ここのみ凝灰質砂岩である。石切り跡III地点からは東に27mほど離れて存在する。これも調査前から一部切り出し跡が露出しており、土層の堆積も表層土のみでごく浅いものであった。標高は23~24.5mを測り、規模は幅

(東西方向) 1.7m、奥行き(南北方向) 1.3m、自然岩盤面からの深さは最も深いところで35cm程度であった。IV地点同様、ここも岩盤斜面に対して直角方向に切り取られ、40cm×50cmの正方形に近いものと、一辺45~60cm×一辺80~90cmほどの長方形のものとの切り出し跡が残る。切り出されたのはせいぜい2、3個程度であったものと推定される。砂岩であることや特に西側にクラックが認められる点などから、あまり石切りには適さなかったかとも考えられる。全体に風化が進んでいる状況にあったが、下方で認められた40×50cmの切り出し跡には、短辺側に刃幅2.0cm前後のヤの痕跡が3本認められた。なお、出土遺物は認められなかった。



第26図 大井谷石切場跡IV・遺構実測図(1:60)

IV 上塩治横穴墓群第14支群の調査

調査の概要

上塩治横穴墓群第14支群は、大井谷の中程、北側に伸びる標高50mほどの小支丘陵の西側斜面に立地している。通称山石谷という谷部を挟んで第13支群と向き合う位置にあり、裏側には第15支群が存在する。以前より知られていた横穴墓群で、調査前には丘陵先端の裾部に1穴（1401）が開口していた。また、この丘陵斜面には、近世のものとみられる石切場跡（大井谷石切場跡）が存在し、これにより同横穴墓群の一部が破壊されていた。

調査は、丘陵斜面全体にトレンチを設定することから開始した。当初は丘陵の中ほどより上方には右切場跡以外に遺構はないものと推定されたが、万一のことを想定し一応重機を利用しながら全面表土剥ぎを行うことにしたところ、上方の右切場跡付近にも横穴墓4穴があることが分かり、同じ丘陵斜面に存在するということで、第14支群として扱うこととした（北側から07～10）。この結果、全部で10の横穴墓と関連遺構を検出したが、これらはおよそ3つのグループに分けることができ、①丘陵先端部に集中する1401～1404、②丘陵中ほどの高所に位置する1405～1407、③南側の丘陵高所に位置する1408～1410、の遺構群として把えることができる。その他の遺構には、谷の中程の丘陵裾部で性格は不明であるが近世以降のものとみられる半地下式横穴状遺構（SK01）を検出した。また、遺構に伴わない遺物として、1503付近で須恵器壺破片を多数認めた。なお、尾根筋にもトレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物とも認められなかった。本横穴墓群については、調査終了後、石切場跡にあわせて縮尺20分の1、5cmコンタによる空中写真測量を実施し、平面・立面図化を行った。

1号穴（1401）（第27図、図版22）

不整逆台形状の平面プランで、平天井にも近い断面アーチ状を呈する横穴墓である。前庭部、羨道部、玄室部からなり、排水溝などは認められない。丘陵先端の裾部に近い凝灰質砂岩にうがたれた穴で、標高は玄室床面で22.8m、ほぼ西方向に開口する。2号穴とは3.5mの距離をおく。

玄室

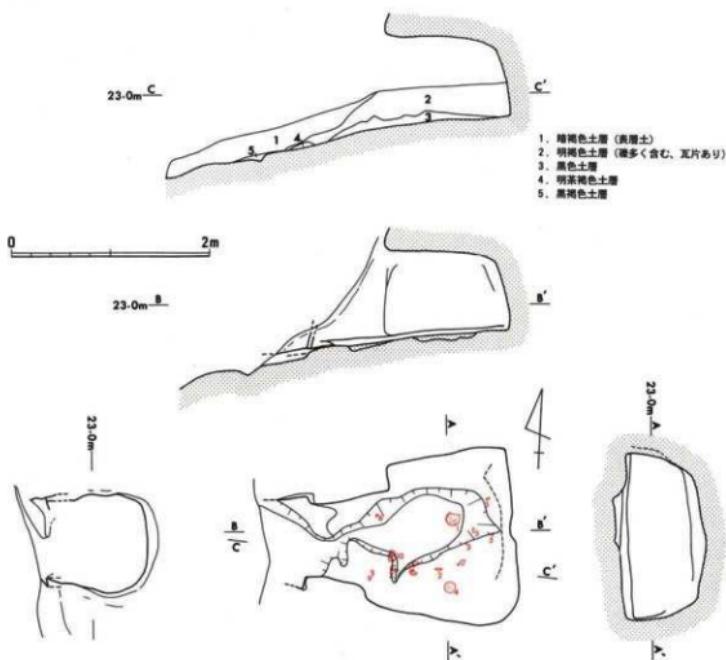
平面は、袖が左右対称の位置にはないが、奥壁側が広くなる不整形な逆台形を呈しており、奥行きが左壁側で1.2m、右壁側で1.55m、幅は前庭部側で1.45m、奥壁側で1.75mを測る。床面は、中央部分がくぼんでいるが、本米は平坦であったと思われる。各壁面は内傾しながら、大井部にいたる。天井部との界線ではなく、天井は平天井に近い。床面から天井までの高さは最大で90cmと低い。羨道部は、奥行き60cm、幅が前庭側で75cm、玄室側で90cm、高さ95cmを測り、玄室側にむかって広がる。

加工痕跡

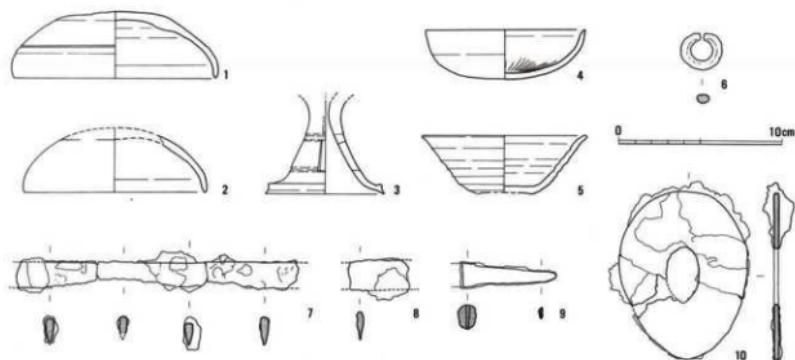
開口していたこともある、全体に風化が進み、加工痕跡を認めることが難しい状態にあったが、玄室右側の床面には縦方向にながれる粗い筋状の痕跡が認められた。

出土遺物（第28図、図版47）

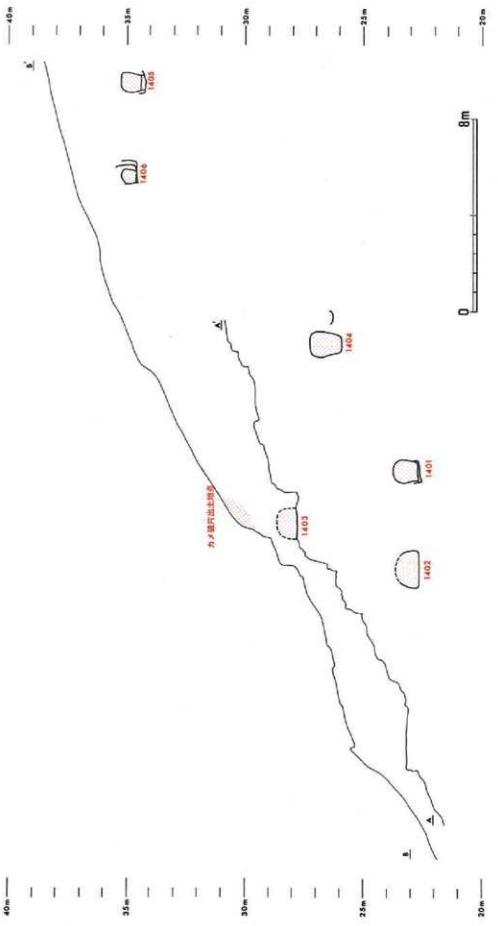
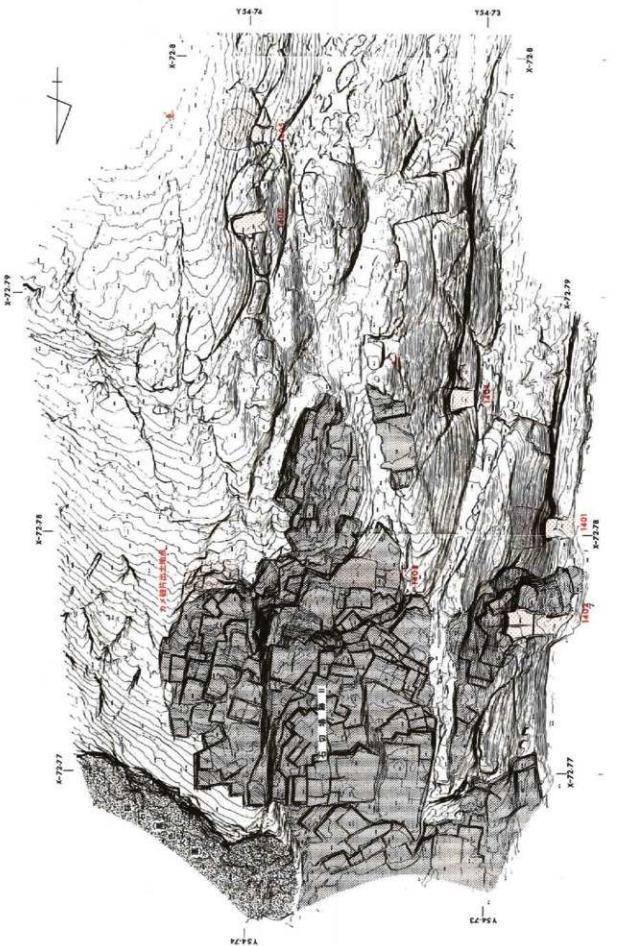
1・2は、天井部から床部にかけて丸味をもつ須恵器壺蓋である。1は口径13cm以下の小型のもので、約1/5が欠損する。2は1よりさらに小型で、推定ながら口径が12cm以下のもの、約1/5が遺存する。3は、須恵器壺の脚部破片である。底部径が7.3cmとかなり小型のものである。ごく浅い沈



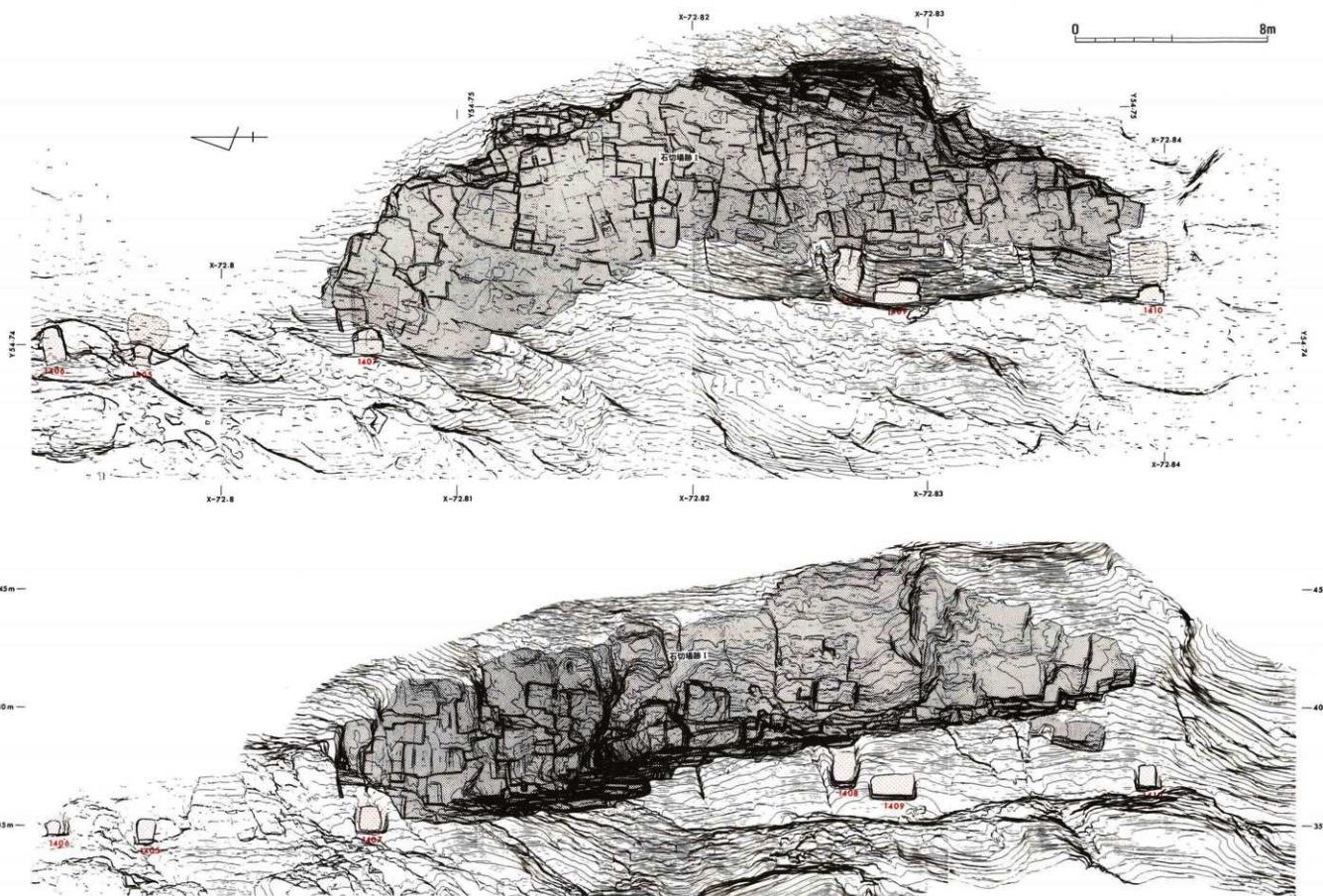
第27図 1401遺構実測図 (1:50)



第28図 1401出土遺物実測図 (1:3, 4・5は土器)



第29図 上塙治横穴墓群第14支群配置図その1(平面図、立面図、1:160、1401~06)



第30図 上塙冶横穴墓群第14支群配置図その2 (平面図・立面図、1 : 160, 1405~10)

線2条と2方向二段透かしが施されている。4は、暗文のある土師器坏の完形品で、いわゆる畿内產土師器と呼ばれるものである。口径9.75cm、器高3.0cmを測る。丸底で体部は内湾し口縁端部をわずかにつまみ出す。器壁が薄く、胎土は精緻で、色調は赤褐色を呈する。器面調整は全体に丁寧になされ、外面部は体部上半がヨコナデ、同下半から底部にかけては小まめに押さえを施すか、ないしはヘラ磨きがなされている。内面は一気にナデ回したうえで、放射状の暗文が施されている。5は土師器坏の破片で、口径に対して底径が小さく体部がよく外傾し、器壁が薄い。体部は内外面とも回転ナデだが、底部は糸切りの可能性がある。6は長径2.5cm、短径2.25cm、厚さ0.7mmの耳環で、鍍金が施されているが、遺存状態は良くない。7～9は鉄刀片で、10は無透かしの鍔である。

2号穴 (1402) (第31図、図版23)

平面形が縦長プランを呈し、やや胴張りの感さえする横穴墓である。壁面と天井部との界線が不明瞭で、アーチ（カマボコ）状の横穴墓である。いわゆる羨道部に相当する部分が判然とせず、玄室部、前庭部から構成され、排水溝を伴っている。

第14支群中、尾根先端のもっとも低い位置にあり、標高は玄室床面で22.6mを測る。凝灰岩の岩盤に、(一部凝灰質砂岩)にうがたれ、西方向に開口する。近世の石切場によって玄室の前半分以上が破壊されている。

玄室

平面は、奥行きは前庭側の山袖から測った場合1.8m、幅は奥壁側で1.4m、中央部で1.6m、前庭側で1.35mを測り、わずかに胴張りの感がある縦長タイプのプランを呈している。床面は、平坦でわずかに傾斜がつき前庭側が低い。床面を二分するように中央に排水溝が設けられており、奥壁から2.05mのところにある段差まで達している。奥壁に沿って認められるが、奥壁はちょうど岩盤の節理面に一致している。壁面は丸みを帯びながら内湾し、各コーナーの立ち上がりは曖昧な線となっている。天井部との界線はなく、丸みをもって天井部に達する。天井部はアーチ（カマボコ）状に成形されていて、床面からの最大の高さは90cmを測る。玄室前側の袖から前方に25～30cmほどのところにある段差は4cmあり、通路状の前庭部にいたる。前庭部は、右の側壁面が右切りによってなくなってしまい、明確にしがたいが、段差の部分で幅85cmを測り、左側はそのままほぼ直線的に80cm伸びて岩盤緩斜面にいたる。右側は、わずかに残存する段差付近の様子からみて左側同様1.5m程度直線的に伸びていたものと推定される。これにより想像される前庭部分は、先端部でもあまり広がりをみせず、範囲もかなり狭いものであったかと思われる、通路としてのみ機能していた可能性がある。床面はゆるやかに傾斜する。

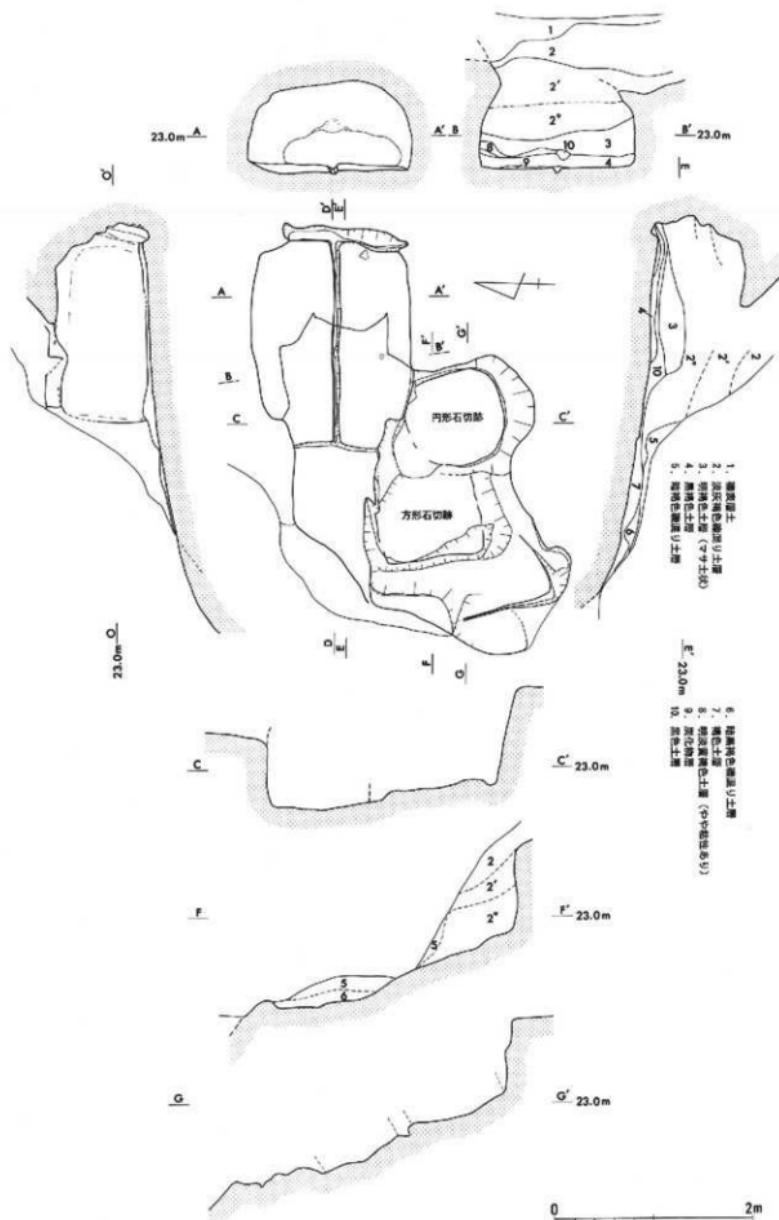
加工痕跡

風化にもよるとみられるが、特に明瞭な加工痕跡は認められなかった。玄室床面などはもともとていねいに加工調整されていたのではないかと思われる。

山上遺物は、甕片を数点検出したのみである。

3号穴 (1403) (第32図、図版24)

縦長平面プランでアーチ形式の横穴墓である。近世石切りにより床面を残して大半を失うが、およ



第31図 1402遺構実測図（1：50）

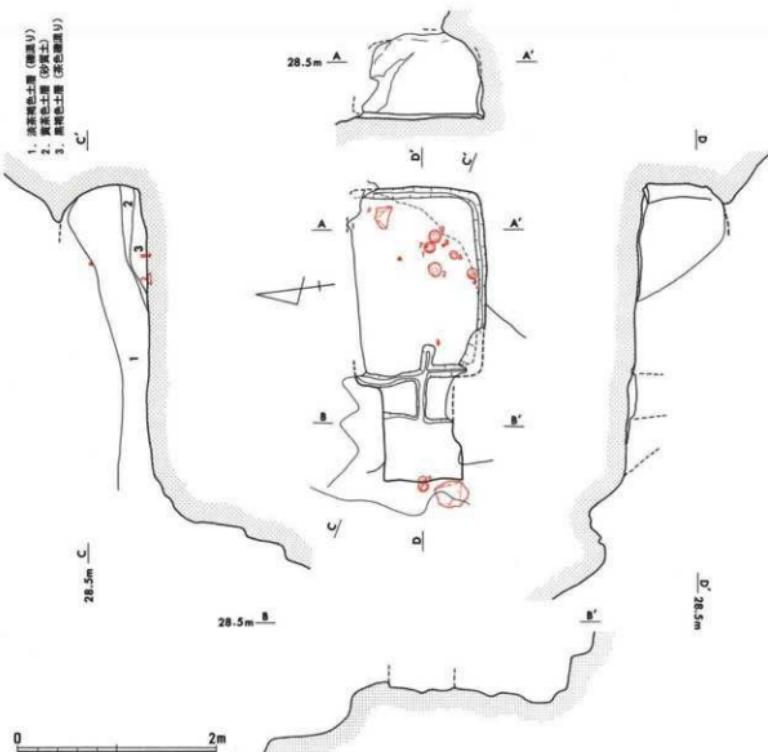
そ羨道部、玄室部からなり、排水溝を伴っている。前庭部は明確に設けていたかどうかは不明である。1・2号穴の上方にあり、丘陵頂部付近に位置する。玄室床面の標高は28.1mで、1・2号穴との比高は5mほどである。凝灰岩の岩盤に穿たれたもので、開口方向は西北西である。

土層堆積状況

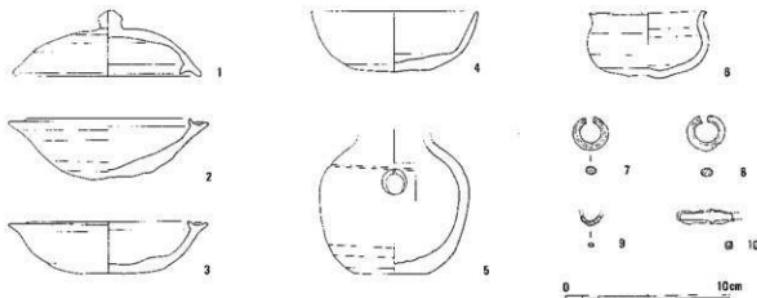
3号穴は、大半石切りによる疊混じり土である①層が堆積していたが、中央より奥壁側にかけてはこれより下位に別に②層、③層の堆積が認められた。遺物は、羨道先端部で須恵器5が、玄室中央より右奥付近にかけての床面ないしそのほぼ直上で同1~4・6、および耳環7・8を検出した。また、玄室左奥コーナー付近の床面上で河原石かとみられる角礫が認められた。なお、床面からは55cmほどの高さの①層中から石切りに伴う鉄製品(ヤ)が出土している。

玄室

平面は、左側壁側と右手前のコーナー部分を失っているが、奥行き1.85m、幅(推定)は羨道側で1.3m、奥壁側で1.35mを測り、縦長方形プランを呈している。床面はほぼ水平であり、遺存状況



第32図 1403遺構実測図 (1 : 50、▼印はヤ出土地点)



第33図 1403出土遺物実測図 (1 : 3)

からすると排水溝が各壁面に沿って巡っていたものとみられる。この排水溝は、さらにそのまま羨道部中央に向かい、玄室側から彫り込まれた短い溝と合流して羨道部中央にある段差まで及んでいる。壁面は、右側壁から奥壁にかけて残存するが、両壁ともほぼ直立し、コーナーの立ち上がりの線も高さ65cmまで比較的はっきりしている。天井部は大半失われてないが、右奥の側壁から天井部にいたるやかな曲線の動きからすると、アーチ状に成形されたものとみられる。床面から遺存する天井部の最も高いところまで高さ83mを測り、天井部はこれ以上あまり高くはならないものと思われる。羨道部は、玄室袖から岩盤の削り出しが認められる先端まで長さ95cm、幅は奥側で75cm、前方側で80cmを測るが、途中6cmほどの段差が設けられており、これより奥側が羨道部、また手前側が前庭部を意識していたのかもしれない。

加工痕跡

玄室床面には、かなり広い範囲にわたりほぼ縦長方向の掘削工具によるとみられる筋状の痕跡が認められた。右壁面にはほぼ横方向に掘削工具の痕跡が筋状に認められた。また、奥壁、および右壁面が床面から立ち上がる間際では刃幅4.5~5cmほどの平ノミ状の掘削工具の痕跡が認められた。

出土遺物（第33図、図版48）

1は、宝珠状のつまみを有する須恵器壺蓋の完形品で、内面にはかえりがつく。2・3はともに受部のある壺身の完形品で、短く内傾する立ち上がりをもつものである。4は受部がなく底部から体部にかけて丸味をもって終わるだけの壺身で、口径は10cmちょうどとかなり小型である。5は竈の洞部で、穿孔部の上位に一条の浅い沈線が巡っている。6は小型の壺と考えられるものである。口径7.1cm、器高4.1cmで、口縁近くで洞部を少しずつぼめて広口の口縁とする。口縁端部は狭いが平坦面を有している。7・8は耳環で、鍍金が施されている。9は原形不明の青銅製品である。厚さ3mmと薄い。

4号遺構（1404）（第34図、図版25）

凝灰岩の岩盤に水平方向に彫り込まれた小穴造構である。1号穴の右斜め上方の位置にあり、標高は床面で26mで、西南西に開口する。開口は、幅が下端で65cm、上端で1.15m、高さ1.35mで丸みのある逆台形状をなし、平面的には奥行きが最奥部まで1.85m、奥の最も広がる部分で幅1.2mを測り、開口に比べて奥が広く設けられている。奥部は、岩盤の模様面と重なって掘削が終わっている。床面は、

ほぼ平坦に作られているが、天井は奥に向かって低くなり、最も低いところで床面からの高さ55cmを測る。側壁は直立気味に削られ、総じて断面は方形状になる。この小横穴の場合の掘削痕跡は、天井部および壁面上位は風化のため不明であるが、床面および壁面下方には横穴墓にみられるものと同じ縦方向の筋状痕が認められた。成形段階にも至っていない、掘削途中の横穴墓ではないかと思われ、掘削をはじめてすぐに放棄されたものではなかろうか。なお、この穴の右側50cmのところにも幅60cm、高さ約15cmほどの軽く削られた部分が認められた。

出土遺物は、覆土中のかなり上位から須恵器破片1点を検出した。上方からの自然の流れ込みによる遺物と考えられる。

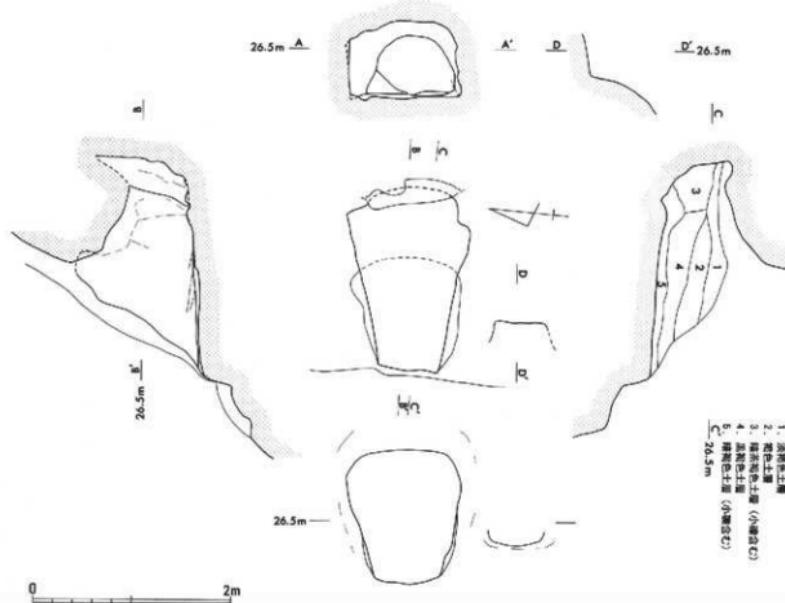
出土遺物（第35図、図版48）

短く内傾する立ち上がりをもつ須恵器壊身片である。推定口径は10.3cmで、小型の部類のものであろう。

5号穴（1405）（第36図、図版26）

凝灰岩の岩盤にうがたれた横穴墓で、標高は玄室床面で34.4mを測り、西北西方向に開口する。

玄室は、平面は丸みを帯びて不整な茄子状のプランを呈している。奥行き1.3m、幅は羨道側で1.2m、最大となる中央部で1.75m、奥壁側で1.4mを測る。床面はほぼ平坦に造られるが、排水溝は認められない。壁面も丸みを帯びて内傾し、そのまま天井部にいたり、全体としてドーム状の形態をとる。



第34図 1404遺構実測図（1:50）

床面から天井部までの高さは最大でも80cmで、かなり低い造りとなっている。

加工痕跡

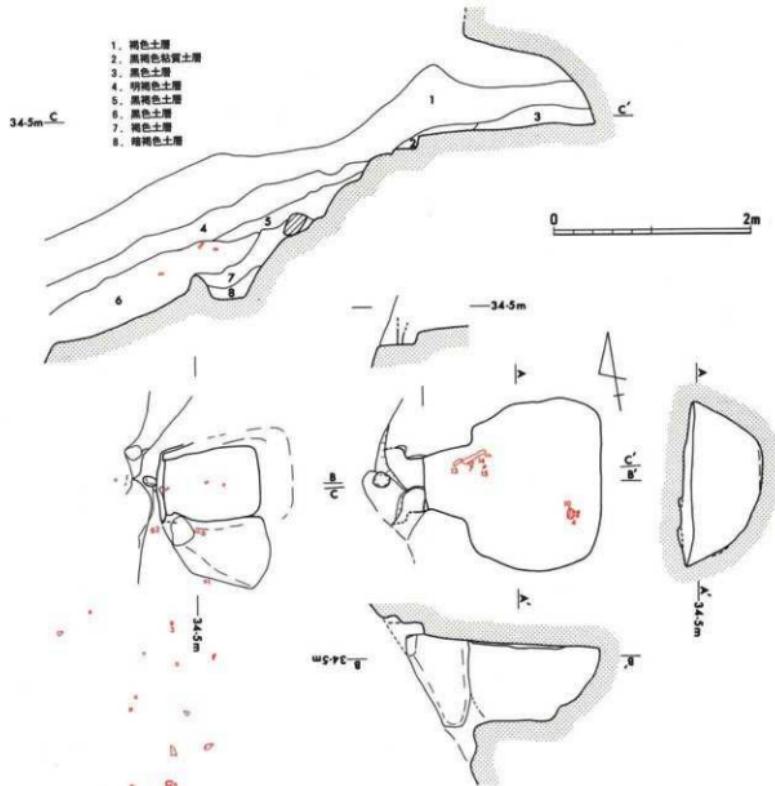
既に開口していたこともあるって、全体に表面の風化が進んでいるが、天井部にはかなり粗いタッチでのこされた掘削工具によるとみられる刺突状の痕跡が認められた。

遺物出土状況

遺物は、玄室内と前方の中央から右手にかけての堆積土中から出土した。玄室では、右奥部の床面直上で須恵器1点(4)と玉類1点(10)が、また、羨道部にかけての手前左側では床面よりわずかに浮いた状態で須恵器破片1点(7)と鉄刀破片数点(13~15)を検出した。前方では、須恵器類が細かな破片となり(1~3・5・6など)、しかもかなり広い範囲にわたって散在していた。



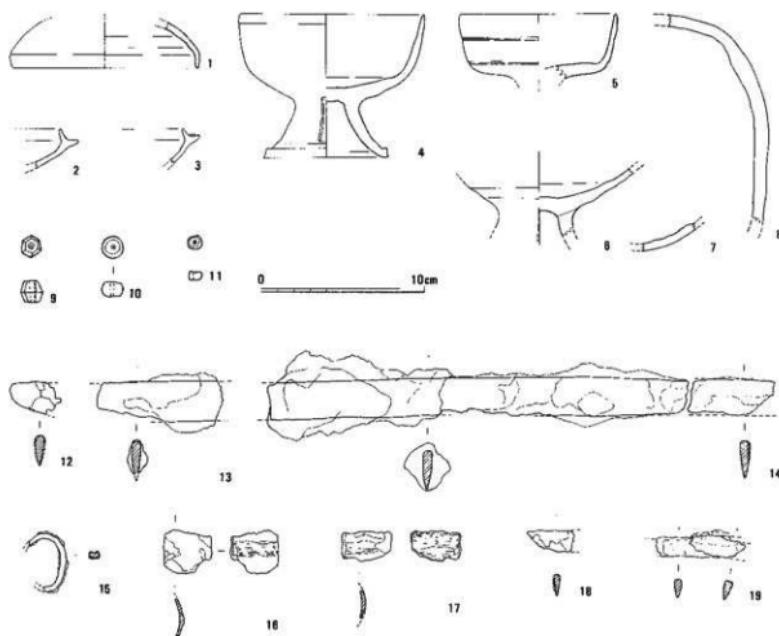
第35図 1404覆土出土
遺物実測図 (1 : 3)



第36図 1405遺構実測図 (1 : 50)

出土遺物（第37図、図版49）

1は、天井部と口縁部との境のない丸味を帯びた須恵器环蓋の破片で、推定口径11.3cmの小型のものである。2・3は、ともに短く内傾する立ち上がりをもつ須恵器环身の小破片である。4～6は、須恵器無蓋高環で、4・5は小型のものである。4は完形品で、脚部に比べて环部が少し大きめで、見込みもやや深めである。脚部には2方向一段の台形透かしがつく。环部は体部が少し丸みをもちながら立ち上るもので、沈線などはみられない。内面には径7.2cmの重ね焼きの痕跡が認められる。环部のみが遺存する5は、体部と底部の屈曲度が大きく、体部はやや直立気味にたちあがる。外面に2条の浅い沈線を巡らせている。6は、环部と脚部との接合部の破片である。环は体部を欠くが、大きく開くタイプのものであろう。脚部には2方向に切り込み状の透かしが伴うものとみられる。7は、外面が回転ヘラケズリ、内面が回転ナデ調整の小破片である。器種は小壺類ではないかとみられる。8は外面が叩き目と回転ナデ、内面がナデおよび回転ナデ、外面が回転ナデと、比較的よくナデ消されながらも叩き目痕が観察されるもので、破片のカーブからして瓶類ではないかとみられる。9～11は玉類で、9が水晶製の切り丁玉、10・11はガラス製の小玉である。12～19は鉄製品である。12～14は鉄刀の刀身部、15は座金具と考えられる。16・17は、内面に木質がわずかに残存している。18・19は刀子であろうか。



第37図 1405及び周辺出土遺物実測図

6号遺構 (1406) (第38図、図版27)

ややクラックの多い凝灰岩の岩盤にうがたれた小穴遺構である。丘陵斜面でも比較的頂部に近く、5号穴とほぼ同じ高さ（標高は床面で34.5mを測る）で、左側（北側）3mの位置にある。開口方向は西南西である。先端から1.1mのところで両サイドに幅8～12cmほどの狭い壁面が門風に立ち上がる。幅は先端から1.2mのところまでは80～90cmある。その後は両袖ができるで間口が幅68cmほど狭くなり、途中で掘りそぼまる。中程の両袖は山側に傾きながらも高さ85cmのところまでは立ち上がりがしっかりとしている。間口が狭いが、途中門状に形成し段階的に掘削するなどの掘削工程が認められ、單なる小横穴とはい難く、横穴墓の掘削途中何らかの事情で中断した状況を示した遺構ではないかとみられる。

出土遺物は、認められなかった。

加工痕跡

床面は、奥側にかけて掘削工具によるものとみられる縦長方向の筋状の痕跡が認められた。また、奥部と左壁面側の奥側には先端の刃幅4.8～5.0cmを測る平ノミの痕跡がはっきりと認められた。なお、筋状の痕跡は、左壁面や天井部側にも認められたが、この痕跡の一部はこの平ノミによって生じた可能性がある。

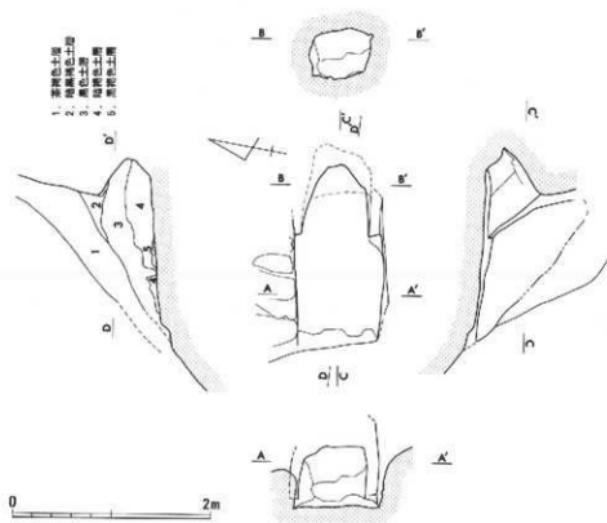
7号穴 (1407) (第39図、図版28)

寄棟（四注）式家形妻入り形式を意図したものである。狹小な前庭部、片袖型の羨道部、および玄室部からなり、片側のみの排水溝を伴っている。5号穴とほぼ同じレベルの凝灰岩の岩盤にうがたれており、その位

置は5号穴から
は南方向に9m、
また、逆に8号
穴からは北方向
に20mの距離に
あり、やや孤立
した感のある横
穴墓である。標
高は玄室床面で
35.9mである。
西方向に開口す
る。

土層堆積状況

石切りにより
堆積した前面の
土層を排除した
段階で確認した

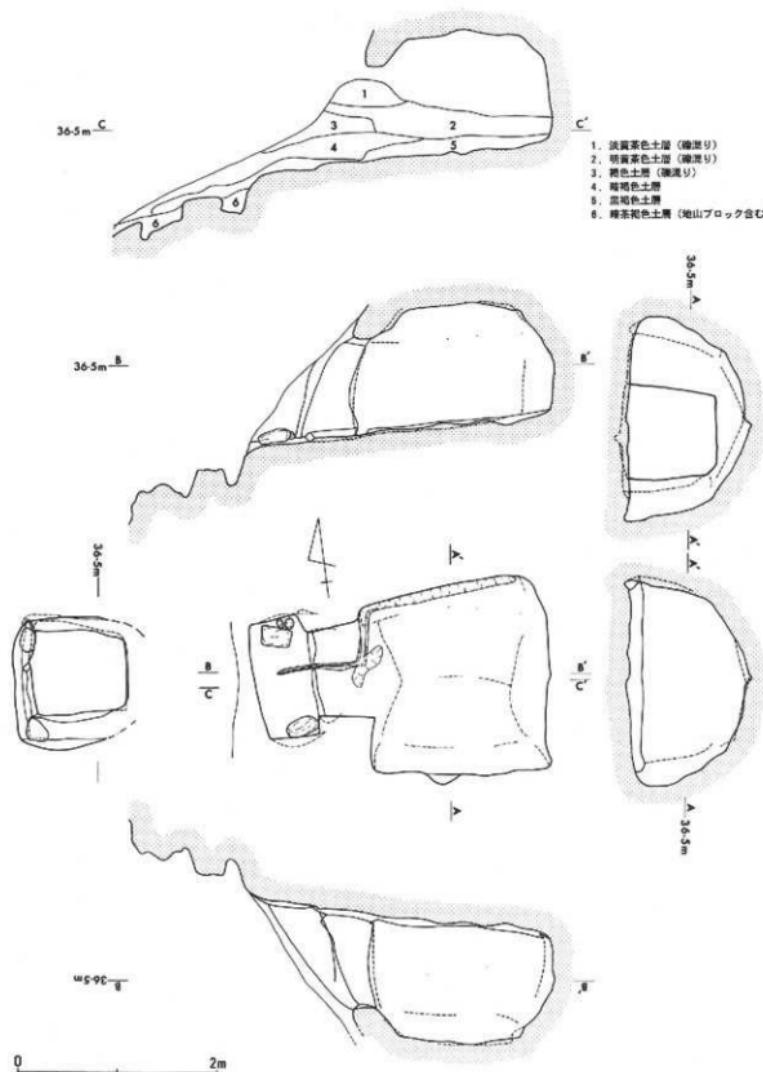


第38図 1406遺構実測図 (1 : 50)

構穴墓である。疊混じりの①～③層は玄室奥部まで堆積していた。さらにこれより下位に④・⑤層が堆積しており、石切りが行われる以前に既に開口していたものと思われる。

玄室

平面は、奥行き1.95m、幅は羨道側で1.6m、奥壁側で1.95mを測り、方形ながらやや奥に広がる台



第39図 1407遺構実測図 (1 : 50)

形状のプランを呈している。床面は、平坦で、奥壁側がわずかに高くなっている、傾斜がつく。排水溝は左壁側に沿って掘り込まれているが、左手前隅からは中央に向かい、羨道のやや左寄りを通って前庭部まで伸びている。各壁面はわずかに丸みをもちらながら内傾し、各コーナーの立ち上がりは曖昧ながら認めることができる。天井部との界線（軒線）は曖昧になり、比較的はっきりしているのは右側だけである。この部分で床面からの高さは90cmを測る。天井部は、曖昧ながらも棟線および下棟線が認められ、棟線を開口方向に向けた、いわゆる寄棟（四注）造りで妻入り形式の形態をとっている。床面から棟線までの最大高は1.23mである。羨道は、玄室からすると左壁側に極端に片寄って設けられており、高さ95cm、奥行き55cm、幅は前庭部側で85cm、玄室側で1mで、前庭部側がわずかに狭く、5cmほどの段差を有して前庭部にいたる。前庭部は、岩盤加工面が幅1.2m、奥行き60cmで、短くて狭い。

加工痕跡

全体に風化がやや進むが、壁面や天井部に角錐状の刺穴痕を多く残しており、特に界線（軒線）上に認められる。また、右壁面の手前側の約1/5ほどの範囲は、刃幅4.5cm程度の平ノミ状工具によるとみられる調整痕が認められた。

遺物は 前庭部の両隅に閉塞に用いられていたとみられる凝灰岩の小塊を、右手に1個、左手に3個床面直上で検出したのみで、土器などは全く認められなかった。

8号穴（1408）（第40図、図版29）

界線が曖昧であるが、寄棟（四注）式家形妻入り形式のものとみられる。前庭部、羨門部、玄室部からなり、やや縦長方形平面プランを呈しており、一部にごく短い排水溝が認められた。玄室床面の標高は36.9m、開口方向は西北西である。凝灰岩の岩盤にうがたれており、一部は近世の石切りのために破壊されている。7号穴からは20m南側の距離に位置し、すぐ右下方に9号穴が存在する。

土層は、①～③層は石切りの屑石、④～⑥層は、盗掘時から石切りまでの間に堆積した上層、⑦・⑧層は自然堆積土層と考えられる。

玄室

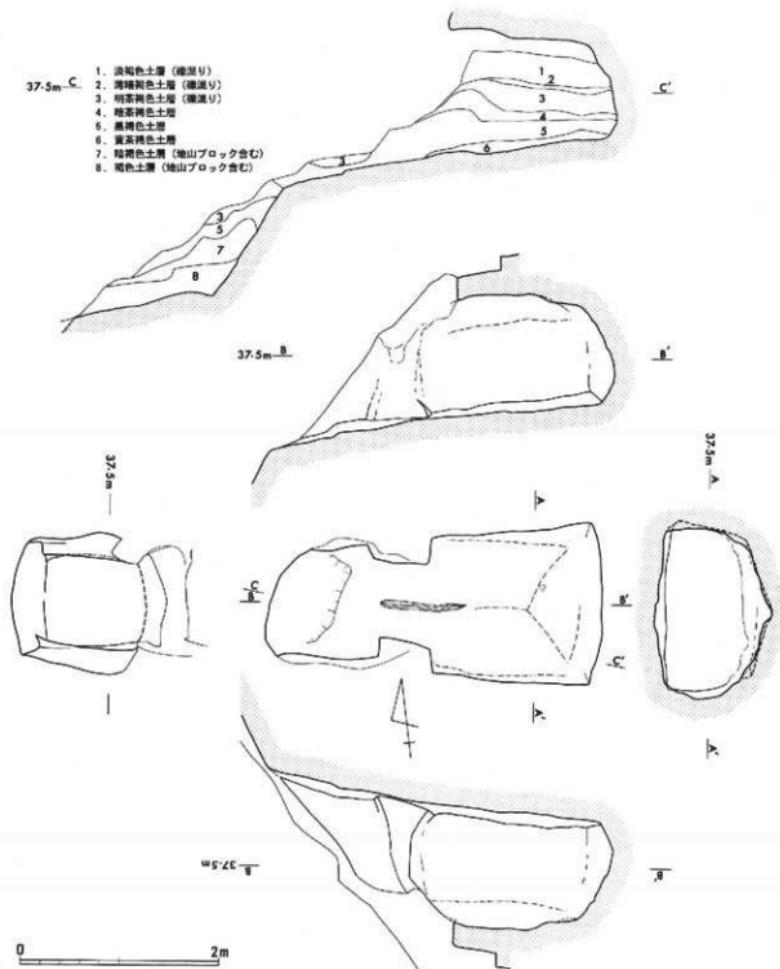
平面は、奥行きが中央で1.75m、両壁側で1.6～1.65m、幅は羨道側で1.35m、奥壁側で1.64mを測る。方形ながら開口方向に向かって縦長であり、かつ、奥に向かってはやや広がりを呈するプランである。床面は、中央がわずかに凹レンズ状にくぼんでおり、前方に向かって傾斜する。排水溝は、主軸線上に玄室手前から羨道部にかけて87cmほど認められただけである。各壁面は丸みをもちらながら立ち上がり、各コーナーのそれは曖昧ながらも比較的垂直的に認められる。壁面と天井部との界線ははっきりと設けないが、奥壁右側にその一部を認めることができる。天井部は、中央の棟線が、曖昧ながらも開口方向に向かってあり、かつ、下り棟の線もわずかに認められるため、寄棟造りの妻入り形式が意図された横穴墓と考えてよいものである。天井の一部は、近世の石切りのために失われている。羨道部は、長さ50～55cm、幅が前庭部側で80cm、玄室側で86cmを測り、前庭部側が狭くなっている、前庭部と区分するような段差は認められない。高さは、石切りのために破壊されていて不明である。前庭部は、長さが中央で1.13m、右壁側で1.05m、左壁側で0.6mを測り、幅は奥側で1.1m、先端側で1.05mを測る。

加工痕跡

全体に風化が著しいが、前庭部中ほどより玄室部の手前側にかけて少し縦方向の筋状痕跡が認められた。また、天井部および界線部、そして左壁面の奥側にかけて刺突痕が認められた。

出土遺物（第41図、図版48）

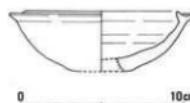
遺物は、玄室の床面直上で検出した須恵器1点のみである。低い立ち上がりをもつ、坏身の破片である。推定口径9.3cm、約1/3が残存する。



第40図 1408遺構実測図 (1 : 50)

9号穴 (1409) (第42図、図版30)

平面が不整な隅丸横長方形プランを呈し、平天井にも近いドーム状の形態をもつ横穴墓である。前部なり羨道部のない、いわば玄室とこの閉塞部分のみの横穴墓である。凝灰岩の岩盤にうがたれおり、標高は玄室床面で36.2mで、西方向に開口する。8号穴 第41図 1408出土遺物実測図 (1:3) の右斜め下方に位置する。上塙治横穴墓群にあっては特異な形



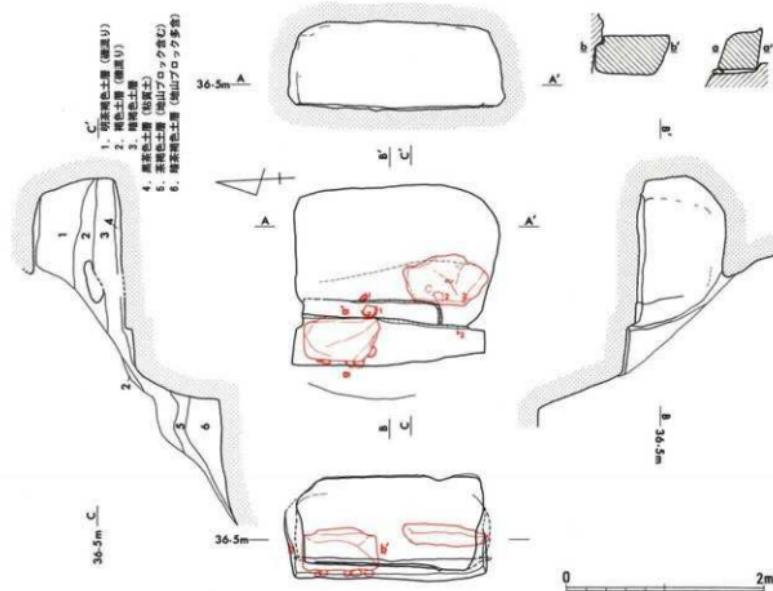
態を示す横穴であるが、これを墓造構とした理由は、遺体を収めるだけの十分なスペースがあること、閉塞施設を伴っていること、盗掘を受けているとはいえ僅かながら副葬品と考えられる土器が確認されたことによる（横穴墓に付随し土器の収納スペースとして機能していたとみられる横穴の場合は、横穴自体が小規模であり、かつ、一般に閉塞施設が認められない状況がある）。

土層堆積状況

①・②層は、上位で行われた石切りの屑石が堆積したもの、③・④層は盗掘時のもの、前方の⑤・⑥層は自然堆積した土層と考えられる。

玄室

平面は、四隅がまるくなかった横長の不整形プランを呈し、奥行きは右側で1.35m、左側で1.05m、幅は奥壁側で最大2.06m、手前側で1.67mを測る。床面は、平坦でほぼ水平に造られている。各壁面は、ゆるやかに内傾しながら立ち上がり、平たい天井部にいたる。玄室より前は、左側は手前のコ



第42図 1409遺構実測図 (1:50)

ナーから一端くびれて内側に入り幅10cmほどの羨道状の奥行きが認められる。一方、右側はくびれがあってすぼまるもののコーナーからそのまま閉塞部にいたり、羨道状の奥行きは認められない。ただし、右側袖25cmのところまで、左側で認められた奥行き分の幅がこの際よりわずかな段差となって表されている。玄室部の前の平坦面は、幅が1.95m、奥行き22~46cmを測るが、閉塞石の残存状況から、閉塞だけのためのスペースとみられる。閉塞石は2個認められ、右側のものは玄室内に横倒しの状態で検出した。閉塞石のうち左側のものは、ほぼこの平坦面の幅に合った切石で、しかも、この切り石の裏面には左袖に合うように加工され、かつまた、上面にもさらに上段に何かを受けるような段状の加工が施された作りのものである。この閉塞石の設置の仕方は、左側壁および床面の段差にきっちり合わせて置き、しかも上面の平坦面が水平になるよう、床との接地面には5・6個の小さな石を詰めて置かれていた。

加工痕跡

玄室天井部および壁面は風化が進んでいる。比較的最終加工調整ができているためか、筋状の痕跡は認められなかった。左側の大井部に達する辺りの一部と、閉塞石の置かれていたところの床面には、平ノミ状工具とみられる痕跡が点々と認められた。

遺物出土状況

遺物は、玄室内で須恵器2点(1・2)を検出した。1は左側の閉塞石背後の床面からわずかに浮いた状態で破片となって出土した。2は右側の倒れ込んだ閉塞石の下およびその周辺でやはり床面からは浮いた状態で破片となって出土した。

出土遺物(第43図、図版48)

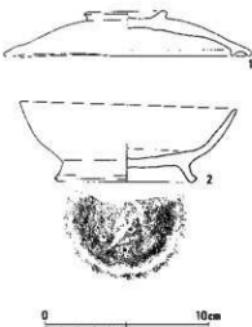
1は、輪状つまみのつく須恵器壺蓋で、内面にかえりがつくものである。2は、高台のつく須恵器壺身で、壺部は体部がやや開き気味に内湾しながら立ち上がり、脚部は少し薄手の高台が「ハ」の字に広がる。底部外面には「-」状のヘラ記号がみられる。

10号穴(1410)(第44図、図版31)

平面がわずかに縦長方形プランで断面アーチ形を呈する横穴墓である。「前庭部」、羨道部、玄室部からなり、短小な排水溝と閉塞石を伴っている。第14支群ではもっとも右端(南側)に位置し、9号穴からは10mほどの距離を置く。凝灰岩の岩盤にうがたれ、西方向に開口する。標高は玄室床面で36.7mを測る。本横穴墓群の中には比較的出土遺物の量が多かった横穴墓である。

土層は、①~③層の堆積は盜掘後の流入土と考えられる。

玄室は、平面が、奥行き1.8m、幅が羨道側で1.45m、奥壁側で1.6mを測り、わずかではあるが縦長の方形プランを示している。床面は、平坦でほぼ水平に作られている。各壁面は比較的ていねいに仕上げられており、わずかに内湾しながら立ち上がる。壁面と天井部との界線はなく、断面アーチ状の



第43図 1409出土遺物実測図(1:3)

形式をとる。

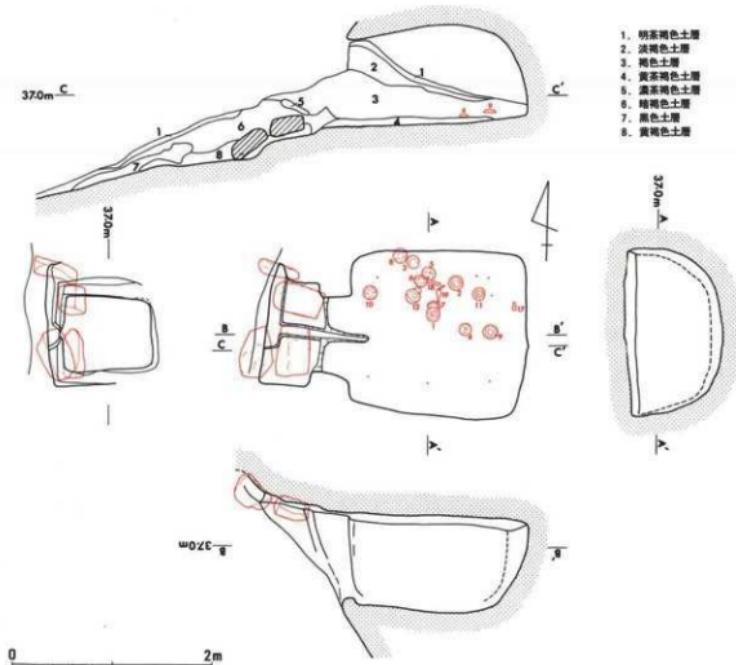
羨道部は、玄室にむかってわずかに右寄りに短く設けられている。幅は「前庭部」側が75cm、玄室側が85cmであり、奥行き35cm、高さは87cmを測る。ほとんど羨門よりに5cmほどの段差を設けて、「前庭部」にいたる。「前庭部」は、奥行き57cm、幅110cmで、短くて狭く、遺存する閉塞石の大きさや出土状況からして、閉塞用のスペースとしてしか機能を有しない部分と考えられる。閉塞石は、4個の切石が認められたが、いずれも横倒しの状態で検出した。岩盤の加工が終わった先端から前面は一旦20cmの落差で平坦な自然面に降りるが、遺物などは認められなかった。

加工痕跡

玄室天井部・各壁面とも全体に風化がやや進んでいる状態にあった。羨門部と玄室の床面に縦方向の筋状の加工痕跡が認められた。また、奥壁の一部と、左右壁が羨道部にいたるコーナーの床面からの立ち上がり部分で平ノミ痕かとみられる加工痕跡が認められた。また、閉塞石には刃幅4.5～5cmの平ノミ痕が認められた。

遺物出土状況

遺物は、玄室のみで出土した。出土遺物は、須恵器12点（1～12）、玉類1点（13）、鉄製品（14～19）で、いずれも玄室の中央から左半分にかけて床面よりわずかに浮いた状態で検出した。羨道部に近い



第44図 1410遺構実測図 (1 : 50)

手前側のものはほど④黄茶褐色土層中に浮いていた。

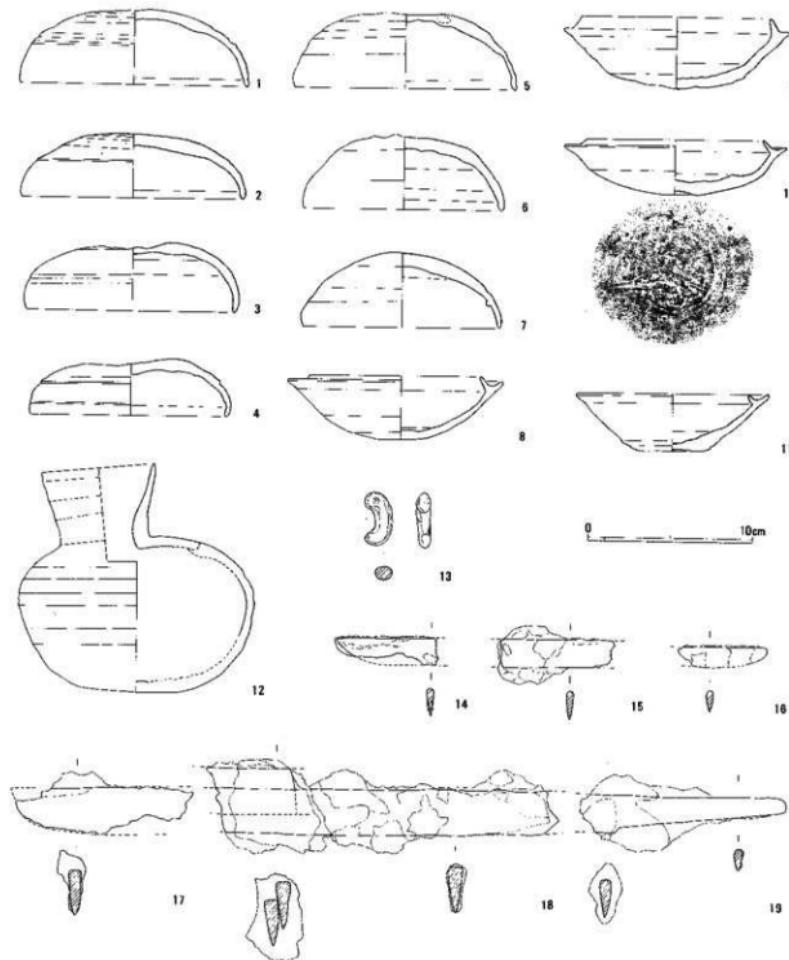
出土遺物（第45図、図版50・51）

1～7は、須恵器坏蓋で、いずれも完形品である。

8～11は、須恵器坏身で、いずれも完形品である。

10の外面底部には「×」状のヘラ記号が認められる。

12は、須恵器平瓶の完形品である。13はメノウ製の勾玉の完形品である。穿孔は一方向から施されている。研磨が不十分なためか、表面には部分的に気泡状の小さくぼみが認められる。



第45図 1410出土遺物実測図（1：3）

14~19は鉄製品である。

S K01 (第46図、図版32)

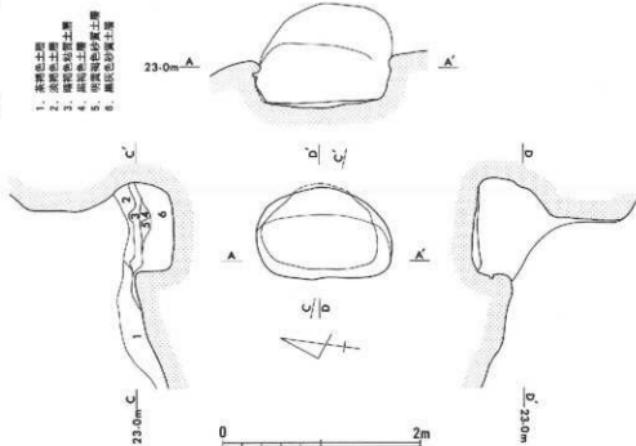
第14支群のある丘陵裾で単独で認めた半地下式のふくろ穴状遺構である。凝灰質砂岩にうがたれていて、中央が深く球状に彫り込まれている。穴の最大幅は1.35

m、奥行き0.95m、中央のもっとも深

いところから天井までの高さ80cmを測る。ツルハシ状の掘削痕跡がほぼ全面に認められる。遺物などは認められなかった。掘削年代・性格ともにはっきりしないが、ツルハシ状の掘削痕跡は近世の石切場跡の認められたそれに似ており、近世以降のものではないかと思われる。

遺構に伴わない出土遺物

1403号穴より約2.5m上がった、東側約7mの斜面で、須恵器壺の破片を多数採集した。表土中から出土とはいえ、同じようなケースが後述する第15支群や第16支群でも認められたことから、横穴墓とは離れた丘陵の尾根上等で横穴墓の葬送に伴い須恵器壺を用いた何らかの祭祀的行為が行われていた可能性が考えられる。



第46図 S K01遺構実測図 (1 : 50)

V 上塩治横穴墓群第15支群の調査

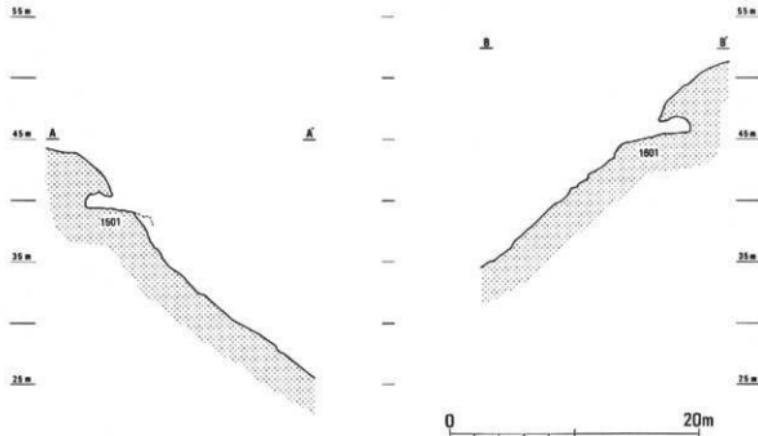
調査の概要

上塩治横穴墓群第15支群は、通称大井谷の中程、北側に伸びる小支丘陵の東側斜面に立地し、第16支群と向き合い、また裏側には第14支群が存在する。以前より知られていた横穴墓群で、調査前には丘陵先端側の高所に2穴（1501・02）の開口が認められた。試掘調査は、第14支群と同時に実行され、まず同斜面に計4本のトレンチを設定して行ったが、この2穴からはかなり距離をおいて谷奥の中腹地点で須恵器片が採集されたことから、さらにこの付近の丘陵頂部に近い部分を試掘したところ、新たに横穴墓（1504）の存在を認めたため、この結果を踏まえて斜面のほぼ全域にわたって本調査を実施することとした。調査終了後には後述の第16支群とも合わせ、縮尺100分の1、25cmコンタによる空中写真測量を行った。

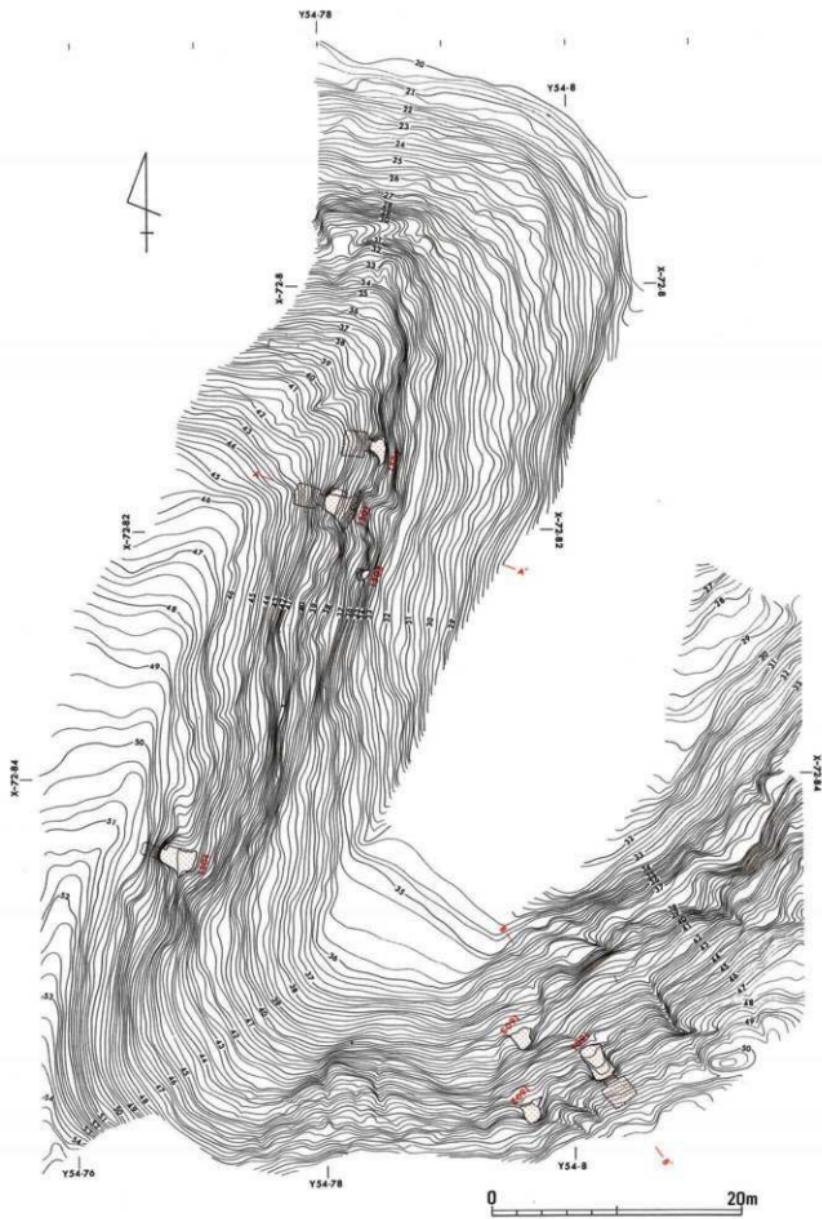
調査の結果は、横穴墓3と小横穴状造構1の計4つの遺構を検出した。これらは丘陵先端の横穴墓2（1501・02）と小横穴1（1503）のグループと、これより南側に30mの距離をおいて単独で存在する横穴墓1（1504）とに大きく分けられる。このうち1501号穴は、造りのていねいな家形寄棟（四注）式妻入り形式のもので、前庭部の壁面には小横穴を伴う特異な構造をもっていた。遺物は、横穴墓から环蓋身・高环・平瓶・壺の須恵器類と鉄製品類が出土している。とりわけ、1501号穴からは「各」と考えられるハラ書き文字入りの須恵器3点が出土した。このほか、造構に伴わない遺物として、丘陵先端の頂部で須恵器破片が認められた。

1号穴（1501）（第50図、図版36・37）

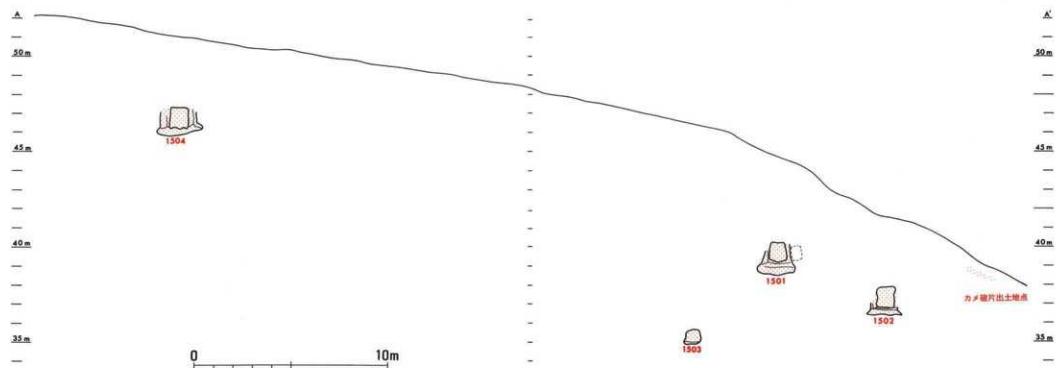
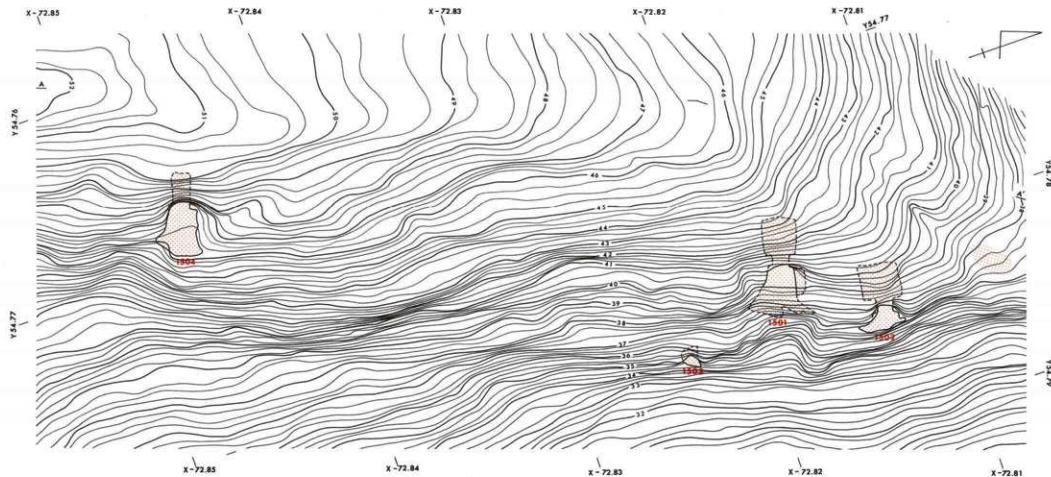
寄棟（四注）式家形妻入り形式のものである。前庭部、羨門部、羨道部、玄室部、そして前庭部の右側面に設けられた小横穴からなり、玄室部から羨門部にかけて排水溝を伴う。第16支群と向かい合



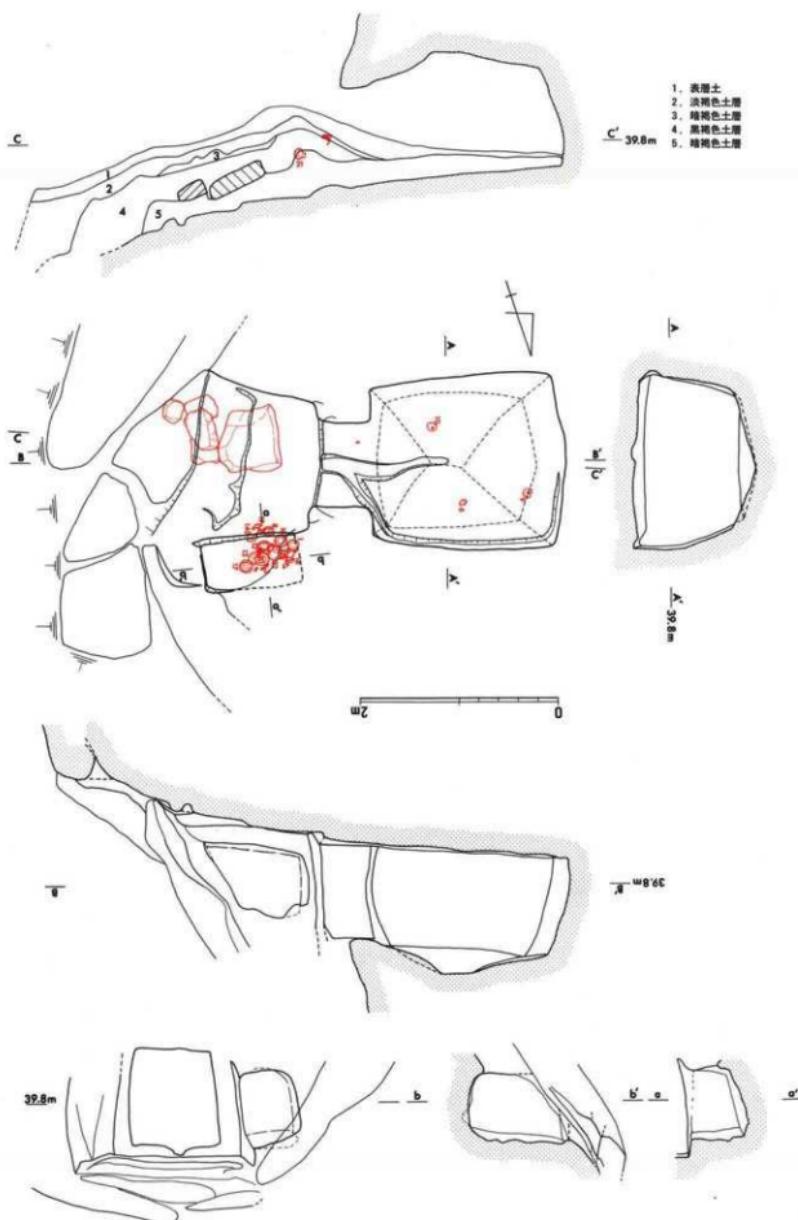
第47図 上塩治横穴墓群第15・16支群丘陵断面図



第48図 上塩冶横穴墓群第15・16支群地形測量図（1:400）



第49図 上塙治横穴墓群第15支群配置図(平面図、立面図、1:120)



第50図 1510遺構実測図 (1 : 50)

う丘陵斜面の先端部付近の高位置にあり、凝灰岩の岩盤にうがたれている。東南東方向に開口し、標高は玄室床面で39.5mである。

土層堆積状況

既に開口しており、調査時点では内部が覗き込める状態にあった。上砂は、玄室内にも認められたが、前庭部に厚く堆積しており、表層からおおよそ①～⑤層の順に堆積していた。これらの上層は盜掘時の搔き出し土、およびその後自然に流入し堆積した土とみられる。遺物は、④・⑤層で認められたが、前庭部では多くが横倒しになった閉塞用の石材とともに⑤層の上面に乗るような状況で検出された。また、小横穴では、別に⑥層が床面から深さ6cmほど認められ、このなかより遺物がまとまって出土した。土層および遺物の出土状況から、盜掘時の攪乱が及ばなかった部分と考えられる。

玄室

平面は、幅が羨道側で1.5m、奥壁側で1.75m、奥行きは中央で1.96m、右壁側で1.83m、左壁側で1.84mを測り、奥壁側がやや広く、かつ、わずかに奥行きの長い、縦長のプランを呈している。床面は、平面をなすが、奥壁側が少し高くなってわずかに傾斜する。この床面には2条の排水溝が設けられており、一つは玄室中央から少しき曲線しながら羨門に至るもの、もう一つは奥壁中央からはじまり右側壁に沿って掘り込まれ、右袖奥（東側）のコーナーや手前で羨道部中央に向かって流れ前者の溝と交わっている。各壁面の仕上げは丁寧であり、わずかに丸みを帯びながら内側に約10°ほどの角度で傾斜する。天井部との界線（軒線）は明瞭で、床面からここまで垂直の高さは、97～100cmを測る。天井部は、棟線を開口方向に向けた、いわゆる妻入り形式で、屋根は各壁面にむかって流れる寄棟（四注）造りの形態をとる。床面から棟線までの高さは1.23mであり、棟線の長さは34mである。天井部の仕上げも丁寧で、各降棟の線も明瞭である。

羨道部は玄室前面のほぼ中央につき、高さ96cm、奥行き50cm、幅85cmを測る。羨門は特別な加工はみられず、10cmの段差をつけて、前庭部にいたる。既に開口していたため、当初の閉塞状況は不明であるが、前庭部の中央付近の⑥層の上面で閉塞に用いられたとみられる石材が認められた。石材は、凝灰岩で、最も大きなものは縦70.5cm、横64cm、厚さ18cmを測る。切石で、横倒しの状態にあった。

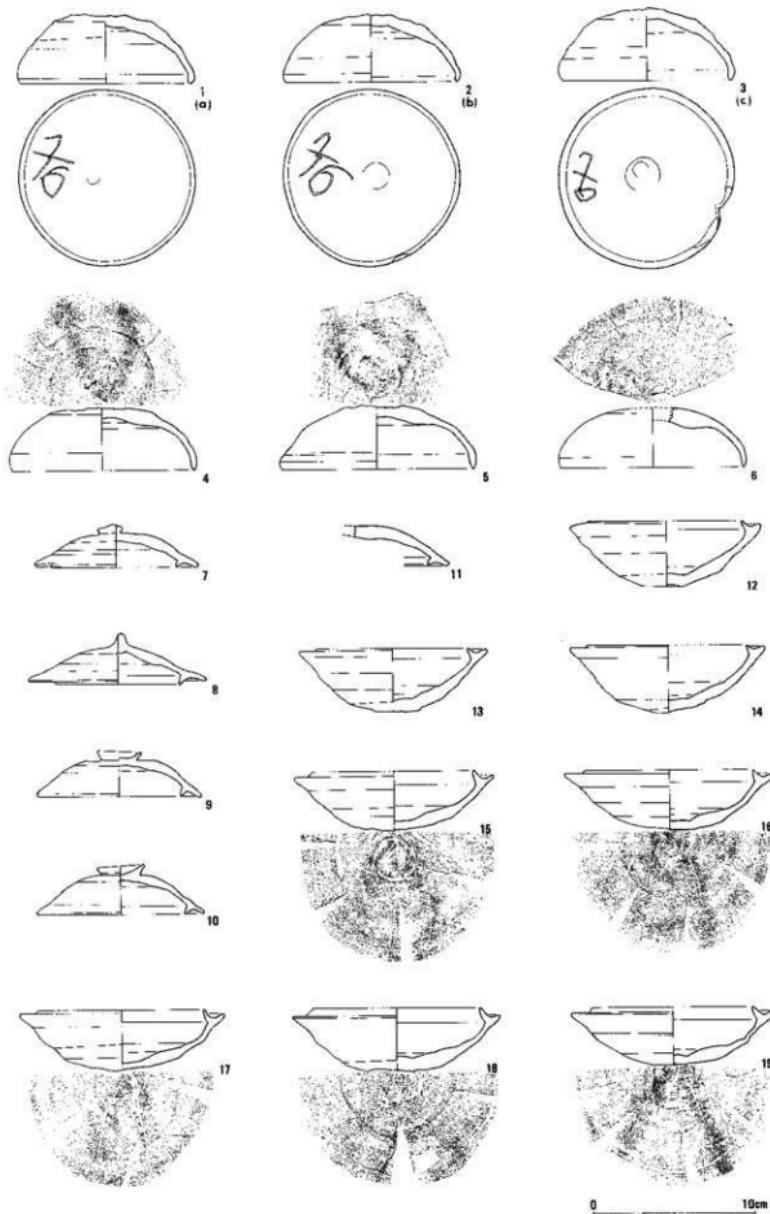
前庭部は、長さはクラックのために判然としないが、調査当初の岩盤先端までの長さは2.7mを測った。幅は、玄室側で1.3m、途中段差のあるところで1.6mを測る。先端部の幅は調査中に岩盤（岩塊）の一部が崩落したため、判然としないが、2m以上はあったものと思われ、やや広がっていたものと推定される。床面はほぼ平面をなすが、前方に向かって下り気味であり、かつ、羨門の段差部分から前方0.8mのところでわずかな段差が設けられている。前庭部の右側壁面には、この横穴墓の大きな特徴である小横穴が設けられている。

小横穴

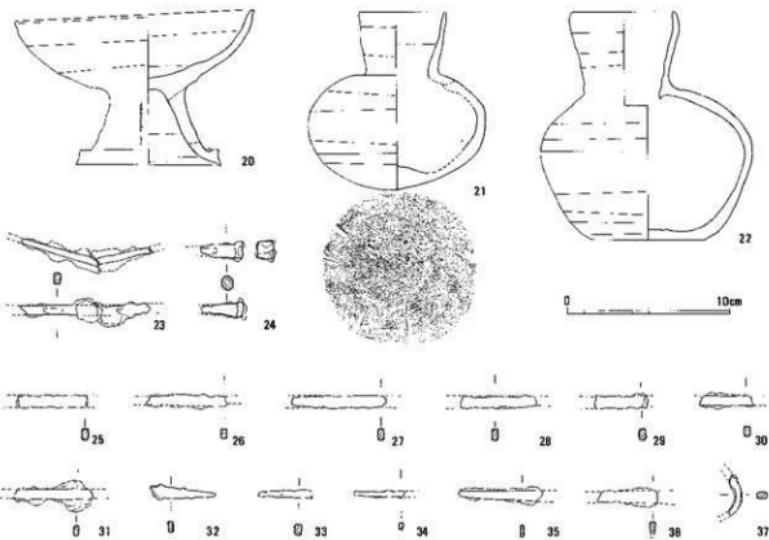
この小部屋は、前庭部の床面から18cmの高さのところに設けられたもので、幅96cm、奥行き50cm、高さ70cmを測る。床面、壁面、天井部の界線は必ずしも明瞭ではなく、丸みのある方形の小部屋である。床面は平坦ではなく、少し凹凸面をなしていた。

加工痕跡

玄室内部は、総じて掘削加工工具の痕跡をほとんど止めないほどにいたねいに仕上げてあったが、天井部に3.3、4.5cmの幅でタテ方向の平ノミ痕が認められた。また、左壁面には先端付近で1cm弱角



第51図 1510出土遺物実測図その1 (1 : 3)



第52図 1501出土遺物実測その2 (1 : 3)

の長方形状の刺突痕が認められた。前庭部側は風化が進み判然としないが、右側に設けられた小横穴内部の床面が凹凸状になっていたのは、おそらく平ノミ状の工具により成形された跡を示すものと思われる。前庭部の床面も凸凹状を呈していた。

遺物出土状況

出土遺物は、須恵器と鉄製品が認められた。須恵器は玄室内から3点(6・9・10)、羨道部で1点(环小破片1)、前庭部で3点(7・21、および甕小破片1)、小横穴で16点(1~5・8・12~20・22)が出上し、そのほか木横穴直下で1点(10)を採集している。また、鉄製品(23~37)は、玄室内および前庭部に堆積した④・⑤層をフルイにかけて検出したものである。須恵器の場合、玄室のもの(6・9・10)は、⑤層より床面より浮いた状態で検出した。それ以外では、7・21は⑤層の上面で、甕破片は前庭左奥コーナー付近の床面近くから出土した。16点を一括して検出した小横穴では、床面から3~5cmほど浮いて出土したが、当初の形状を比較的よく止めているものと考えられる。

出土遺物(第51・52図、図版52~55)

1~11は、須恵器坏蓋である。1~6は、天井部と口縁部との境がなく全体に丸みを帯びた蓋である。7~11は内面にかえりをもつものであるが、つまみに違いがあり、7は宝珠状、8は乳頭状、9・10は輪状のつまみがつく。11はつまみ部を欠失し、形状は不明である。13~19は短い立ち上がりをもつ須恵器坏身である。これらの坏蓋・身には幾つかの特徴的な点やセット関係が見受けられる。すなわち、①坏蓋1~3の3点には内面、それも中央ではなく口縁部に片寄った位置に、ほぼ共通した記号風のヘラ書き文字が認められること、②坏蓋4~6の3点には外面に「<」状のヘラ記号が認められること、③坏身15~19の4点の外面には②と同じ「<」状のヘラ記号が認められること、④、①でとりあげたヘラ書き文字のある坏蓋3点は、ヘラ記号を伴わない12~14の坏身3点と、セット関係に

ある可能性があること、⑤、②で取り上げた壺蓋3点と、③で取り上げた壺身4点は、セット関係にある可能性があることなどがあげられる。

20は、須恵器無蓋高壺の完形品である。21・22は須恵器半瓶で、小型の21は丸底で胴部も球形に近い。底部にはやや執拗かとおもわれるほどに、計6本の線からなるヘラ記号が施されている。22は平底で胴部の重心は上位にあってなだらかな肩がつく。23～37は鉄製品であり、ほとんどが断面長方形を呈している。

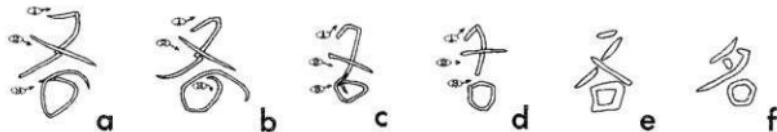
ヘラ書き文字（第53図、図版52）

ここで、1501号穴で出土した、特徴ある3点のヘラ書き土器（須恵器）の文字について、少し詳しく述べてみたい。

まず、これらの書順（正確にいえば、ヘラによる刻順であるが）をみると、土器aは、第1線が、左からほぼ横方向に入り、屈折させて左下に払われており、途中小さく鉤の手状に折り返されてもいる。第2線は、第1線の払いに交差するよう、左上から入ってほぼ真っすぐな線で右下で終わる。第3線は、この2線で構成された又の字風の下にあって、左上から入って歪ながら円を描くように一回転させて終わる。土器bは、上器aとほぼ同じであり、特に第1線と第2線が交わる直下の、鉤の手状の折り返しが共通している。土器cとの違いは、細かい点ではあるが、第1線の横棒が少し斜め下から上向きにはじまっている点、同じく第1線の左下への払いがゆるやかなカーブを描いている点、また、第3線が右方向にやや大きく逃げながらも全体として円に近い点があげられる。土器dは、第1線が少し山形にはじまってカタカナのクの字状になり、最後はわずかに逆方向（右方向）にカーブして終わる。第2線は、左方向から入った右下の線で、第1線の垂下線のやや下方で交差するよう刻まれている。第3線は、第2線の終わりの部分をすこし切るようにしてはじまる線で、歪ながらこれも円を描いて終わっている。

以上のように、この3点は共通して3つの線でから構成されているのが特徴であり、しかも互いがあまり距離をおくことなく連続していて、一つの字形を呈しているといえる。すなわち、上位の又の字状に交差する2線と、その下方にあるほぼ一回転させた1線によって、上位が「又」もしくは「夕」状の字と下位が「O」からなる文字である。特に上器aとbの字形は非常によく似ており、また、土器cも、a・bに比較して稚拙で異なるようでもあるが、基本的にはa・bと同じ字形といえよう。

実は、十器cとよく似た資料に、鳥取県米子市・陰田横穴墓群第12号穴出土の半瓶の肩部に刻まれた、カタカナの「チロ」に似ているとされた例がある（d）。この場合、一見離れているようにみえるが、交差する上位の2線と一回転させたやや丸みのある下位のもう1線が、やはり同じ書き順と連続したタッチでヘラ書きされており、ほぼ同じ字形が類推されるのである。このdの特徴をあえて挙げれば、他に比べ第1線のはじまりが左下より急角度で上がっている、また、第2線が水平に近



第53図 1501出土ヘラ書き文字と参考資料図

（a～c：1501号穴出土、d：米子・陰田横穴墓群12号穴出土、e：松江・岡田山1号墳出土鉄刀銘「各（額）」、f：埼玉・瑞穂山古墳出土鉄劍銘「名」）

く刻まれている、そして、第3線が丸みがあるものの少し角張って口に近い形状を呈していることである。これらa～dに共通する部分を見いだすと、上位は又の字状になって、しかも第1線のはじまりが左下から入って山形に眺ね上がるか、もしくはクの字状を呈する傾向が認められること、そして、下位は円を描くか、または丸みのある口の字状になるかであろう。となれば、さらに上位が「又」で下位が「口」で表現される文字を想定することが可能になり、こうして「各」「右」「名」といった文字が想定されることになる。

ところで、5・6世紀代の金石文資料みると、松江市・岡田山1号墳山上の鉄刀銘では第1文字目が額田部氏の「額」を表す「各」(e)と判読されている。この場合、「額」は異体字である「各」で表わされたうえで、さらに「又」の第1画の「ノ」が省略されて「又」の表現がとられており、本例の上位の字形によく似たものといえる。また、「口」の字を丸く表現する例はしばしば認められるところであり、埼玉県・稻荷山古墳出土の鉄劍銘中の「名」(f)・「加」・「居」・「宮」や、千葉県・稻荷台1号墳出土の鉄刀銘中の「敬」、あるいはまた韓國・慶州市皇吾洞16号墳山上の「高德興鑄」銘銅錐斗の針書銘文中の「高」などの口部の表現があげられる。のことから本例の下位の円表現を「口」の字とみることが十分可能である。

本資料群には、いずれも第1線と第2線とが明瞭に交差するとともに、その払いの長さがほぼ等しく刻まれている。また、第1線が山形になっている特徴があり、「名」「右」とするよりも、「久」の「ノ」の省略形なり簡略化なりの表現とみて、「各」とみるのが妥当といえよう。繰り返すことになるが、上位の「又」字風のものは「各」であって「ノ」の省略形なり、あるいは「ノ」と「又」を含めた簡略化された表現と理解し、また、下位の「O」は「口」の丸文字体の表現と理解するのである。

2号穴（1502）（第54図、岡版38）

ほぼ正方形の平面プランを呈しながら、現状ではカマボコ状の天井部をもつ横穴墓である。前庭部、羨道部、玄室部からなり、排水溝などの付属施設は認めがない。1号穴の右側（北側）やや斜め下方に位置し、標高は玄室床面で37.2mを測る。1号穴からは北に5m離れ、比高にすると2.5mある。丘陵斜面の先端部高所にあり、凝灰岩と凝灰質砂岩との境日の岩盤にうがたれており、南南東方向に開口している。

土層堆積状況

調査前より開口していた横穴墓で、内部が観察できる状態であった。上砂は前庭部を中心に堆積していたが、上から①～④層の単純層で、いずれも盜掘を受けた開口後の自然流入土とみられるものである。かなり以前より開口していたものであろう。

玄室

平面は、正方形プランに近いが、幅が羨道側で1.9m、奥壁側で2.0m、奥行きは右壁側で1.8m、左壁側で1.8mを測り、わずかに横長である。床面は、奥壁側が若干高く作られ、前庭部に向かってわずかに傾斜する。四隅の立ち上がりは途中まで比較的明瞭であるが、その後天井部との界線となるべき変換点は現状では認められず、そのまま緩やかに曲面を形成して天井にいたる。奥壁・両側壁面とも直立はせず、ゆるやかなカーブを描き、内湾する。天井部も平坦ではなく、やはりゆるやかな曲面を形成し、棟線となるような界線を認めがたい状況である。